ビアトリス

創刊號



我れは歴々見たり、朝ぼらけ 二二
東は薔薇もて飾られ、
空あきらかに、日の女王の
柔かき影して高くのぼるを、 二五
その輝きは狭霧もてつつまれたれば、
我が眼は長く眺むるを得たりき。
その如く天人の手より投げられ、 八
車のうちそとに迷ふ花雲の中より、
橄欖の枝を冠となし、
燃え立つ紅の衣のうへ、 三一
緑の袿をまとひ、白き面紗したる
女性の姿こそは現れたれ。

……………………

『泣くことなかれ、なほ泣くことなかれ 五五
ああダンテ、泣くは凡ての惱みより
汝にふさはしきことなれども。

……………………

我れを眺めよ、我れこそはビアトリスなれ』 七三

――ダンテ『神曲』淨罪界第三十歌――

ビアトリス

第一巻
第一號

ビアトリス

第一巻第一號

目次

新道德と新不道德

（エレンケイより）

らいてう

ジョーヂ・エリオットは道德方面で女らしい保守主義者の最高代表者であるが、これとは反對に、同し方面で女の自由の權利を燃ゆるが如くに主張したのはジョーヂ・サンドである。彼女の言葉にはかの不滅の生命ある稀な言葉の部類にいるべきものがある。即ち彼女が、相互に戀愛のない法律上の結婚は不道德であり、同時に法律上の結婚はしてゐないものでも眞實の戀愛があれば道德的であるといつて居ることである。此の言葉の當然の歸結は、現代の結婚に於ける性的奴隷の殘餘全部が法律のもとにあるが故に不道德と言ふことになり、たとへ個人が法律以上に超越した場合でも愛なき結婚をすれば不道德であるといふことになる。で、眞に正當な結婚關係は全く平等で、しかも自由でなくてはならぬ。そしてそれは內部的要求の必要から起つてくるもので、外部的制度によるべきものではない。併しジョーヂ・サンド彼女自身の場合はどうであつたか。不幸にして彼女の數奇變轉な生活は唯一にして眞なる戀愛を發見しこれを續けることは大問題であるといふことを示してゐる。提唱者たる彼女自

身の實生活が彼女の論議に反對の舌端——「戀愛は常に道德なりや」との疑問を向けてゐるとは悲しい矛盾ではないか。絶えず戀愛を追及し離別に襲ぐに離別、結婚に襲ぐに結婚といふやうなことが果して、敢へて夫婦相和し、戀愛なくとも結婚を續けて行くよりも個人並に種族の生活の向上の爲めにより價値あることであらうか。今もし個人のためにそれに贊成するとしても、更に次の疑問が起つてくる——即ち續々改新の結婚や自由結合は子供のために幸福であらうか。それよりも兩親が互に戀愛はなくとも子供に對する義務の觀念から結婚生活をそのまゝ持ちこたへてゐる方が子供にとつては善美な家庭ではあるまいか?。現在のところ此の種の疑問は個々の場合に臨機應變な解決を與へるのを唯一の道とするより外はない。

新性的倫理問題は複雜していろ〳〵な混亂と誤謬とを運んできてゐるのであるが、要するに婦人は將來のより高き道德に新基礎を與へねばならぬと云ふ以外ではない。この道德が善とするところのものは一方に我々が性的道德の事柄に就いて祖先代々相傳へて得來つた最善なもの即ち忠實で變ることなしとの決意をもつた戀愛と、他方に新道德の最善なもの、即ち貞潔とは靈肉の調和から成立する、つまり性的關係にしてこの調和を缺けば不道德であるといふところの確信とを含まねばならぬ。そこで婦人の第一着になすべき道德上の仕事はまづこの二つを一致させ、次にこれを現實と完全に調和させることである。

併し今日までのところ不幸にして婦人はこの使命を全うするにはまだ資格が不十分である。婦人特有の本能は一部は今日までの長い間の屈從とあきらめ主義とにより、また一部はそれに對する現代の

狂的反抗とによつて攪亂されて了つた。戀愛は他の大きな力――例へば自由並に正義に對する要求などゝ共に、それが道德的行爲を刺戟する價値を有つに至るには、客觀的と同時に主觀的立場から指定され、しかもその主客兩觀が調和し居らねばならぬ。この場合に戀愛の道德性が發現するのである。別の言葉で云へば、直接に個人の生活を向上せしめ、且つより豐富にせしめると同時に、その結果同樣に全的に好き影響を與へ得るものが、道德行爲の刺戟力となるのである。たゞ茲に相愛し合ふ二人の仲は他の第三者を苦しめることがあるかも知れぬ。――正義や自由やの要求もこれに類してよく他に迷惑をあたへる――併しこれをもつて直に客觀的の是認がないの、不合理のといふべきではない。私共が自己の倫理的位置を擇ぶにあたつては斷じてこの樣なものを決裁的要素に加へてはならぬ。全體から見て、此の種の苦惱や迷惑は決してさし響きのあるものではない。一體總ての道德進化の辿つた路は個人はおろか、あらゆる階級、否全國民の苦痛の足跡である。つまりその行爲が他を苦しめやうともその苦しみが進步的發展の資となり、決して退步を齎さないものならばいゝのである。ところが此の目安はかの性的奴隷狀態に反抗して騷動をはじめた人々によつてわけもなく蹂躪されて了つた。此の性的解放の時代に於いて、婦人にあてはめた急場の性的道德は、決して法律や習慣の壓迫の幾時代かの後に來るべき本當のものゝやうに普遍的でもなければ根ざしの淺いものでもない。所謂自由戀愛で男にその身を許した女の果して幾人が、かのカントの徒シラーが言つた次の大眞理を口にする權利あるものであらうか。

戀する人は、言はゞあらゆる他の法則の限界(かぎり)を越えて、只々戀の法則にのみ従ふ、此處は一つの

高潮狀態であつて、此處ではかの義務とか道德的標準とかいふやうなものはもはや彼の上に何等の制限をも加へ得ない。

是等の婦人達の行爲を決定するところの感情そのものは決してこの高潮狀態から出てきてゐるのではない。彼等の戀愛なるものは決して眞の大戀愛ではない。大戀愛はその根本的特色として靈と肉とに燃える炎を、點火する能力を有つてゐる。否それのみならず戀人同志の個的性格に生の價値を高め更にその高められた人格の價値が生の價値をさへ增進せしめる。何はさておき、眞の大戀愛は、戀人として必須なやさしさに燃ゆる炎を點火する。此大戀愛に於ては靈魂が孤獨のまゝある時は、肉情を蛇蝎視する。然るに現代の所謂「靈友」なるものは大抵は新らしい快樂に行く刺戟として野卑な欲情をそのまゝ露出し、それで正當な幸福が得られたと思つてゐる。自分自身の生活を生活しやうとする要求が日を追ふて烈しくなる結果は益狂的になつて行く慾望を益野卑に滿足させて悅にいつてゐる有樣である。せめて戀愛でなくとも偉大なる情熱でもいゝから、その情熱の翺翔の翼の羽毛の一つでも彼等に觸れるならまだしも、それさへない、まして大戀愛といふ崇高な高潮狀態は彼等の愛にさへはいらう筈がない。靈のない肉慾、懶惰、センメンタリテイ、妄想を逞くすること、虛榮心、媚百態の有頂天や遊蕩三昧——これ等は皆現代の手つとり早い離婚沙汰、だらしない男女關係、試驗的結婚の連續の原因と數へられるもので、如何にも明瞭に、痛烈に、心靈の加速度的マイナスと野卑の一層迅い加速度的プラスとを示してゐる、世間で人妻の名のついたものゝ殆ど全部、そのなかには子を持つ母親の身で、子供の生活のなかに最も豐富な生の刺戟力を認めてゐながらも、否母親ばかりではない、

光輝ある生の所持者たる良家の處女、箱入娘の殆んど全部さへ程度の多少こそあれ、心のうちでは娼婦のやうな生活を送つてゐる。只本物の賣笑婦と異つてゐるのは金錢を支拂つて貰はないだけのことである。否反對に彼等は借金の形で金をいれあげる。アルコホル、ニコチン、絹の飾りもの、自動車などは、是等の内的娼婦連が生の必要として何の躊躇もなく要求するところのものなのである。丁度これをまた文壇や美術界のボヘミアン連に屬する柔弱の徒がその懶惰な時間を女の媚を買ひとることばかりに費してゐる。是等のミルクスープ者流は自分に藝術上の創進的天才の缺けてゐるのは、官能的歡樂の全部を味ひつくさないところ、殊に女を味はないところからきてゐるなどゝ思つてゐる。此の藝術上の頽廢漢、道德的軟體動物の好一對が、現代に於ては男女の兩側にあるので、わけても現代の婦人こそ實に生の頽廢的歡樂を、軟體動物的藝術家よりも更に猛烈に貪りつゝあるのである。近代の頽廢的藝術家は、自分の情婦の所有品を卷きあげて、勝手放題に遊蕩したり、或は彼等の憧憬を面白半分に誘ひだして自分に向けさせたりするのであるが、此の輩に女性本來の快樂欲と贅澤欲とを加へて見ればすぐと現代の婦人のあらゆる狀態を彷彿させることが出來る。

快樂を貪る男子の欲望を現代の婦人はそのまゝ眞似てゐるばかりか、男子の亂暴狼藉な點までも、また眞似てわがものにしてゐる。男の側に女が居れば男がやさしくなるといふことは古來から期待されたことで、學校に於ける男女混合敎育の實施などもこれに外ならないのであるが社會で男女が自由に交際を許されてゐるところを觀ると、洒落つ氣な若い女が意氣揚々として男かと思はれるやうな亂暴な言葉つきや振舞をしてゐる。大抵の若い女は丁度騷々しいいたづらな學校子供のやうである。この樣に婦人が男性化する眞の理由は男友達に「女々しい」と思はれて不快をあたへるやうなことはある

雅な婦人の温雅な禮儀正しい美徳が無くなるにつれて、彼等の戀愛的生活は益標準を低くした。若し若き婦人にして、これを防止しやうとするならば、男子に對する標準を高くすると同時に自分自身の標準をも低くしないやうにせねばならぬ。

永續の意志を缺いてゐる戀愛は言ふまでもなくその子孫の後までも行きわたる愛の不朽不滅の憧憬心を缺いてゐる。だから母親となることを避けたり、防止したりするのである。無論男子の方がその利己的慾望を滿足させるために子供を產むことを欲しない場合もある。かういふ場合、女子は戀の冒險に於て、子供が彼女に與へる生の興味を求めてゐるのだとすれば、非難の責任は慥に男自身にある是等のことを總稱して現代の新不道德といふ。否敢えて「新」といふほどの必要はない、明にない。歷史の示すところによれば、何時でも過渡期にはかういふ狀態になつてくるものである。だから私は之れを別段とりたてゝいふ程のこともなく、寧ろ默して居やうと思つて居たのだが、是等現代の娼婦達が、自分等のすることを昔流に正直に「不貞腐れ」だと思ふ代りに却てこれを現代の「新道德」だとして誇つてゐるのを見ては默さうにも默されないのである。此の思想の混亂の中に卷き込まれて實際價値ある素質の多くの男女が破滅した。これがどうして新時代が齎す新道德であり得やうぞ、それとは全く正反對に古い性的道德に逆もどりする猛烈な反動そのものである。

逝く春の頃

齋賀琴子

惱ましい欝陶しい日が幾日かつゞいた、それは地上のあらゆる草木が恐ろしい勢で生長する所謂晩春の時節であつた。終日曇つた陰氣な空から晴れ〴〵しい日光の射すこともなく、地には綠の反映が暗い〳〵影を落して、すべての人の顏色が蒼ざめて力なくいた〳〵しく見える頃であつた、來る日も〳〵彼女にとつて愉快な日はなかつた、朝から晩まで燃えるやうな焦燥の念に責められながら、仕事は何一つ出來なかつた、堪へきれぬ倦怠の感じが彼女の身體をおさへつけて意志(こゝろ)のまゝにさせなかつた。すべての事にものうくすべての事に煩はしく、そしてやるせない哀愁が彼女の淚となつて流れた。もろいかよはい彼女の心はサヤ〳〵と云ふ庭の楓の葉づれの音にもかなしく傷められるのであつた。見馴れぬ人の姿を見ると吠え立てることを覺えた飼犬のにがしも可愛いゝと思ひながらうるさかつた。尖つた彼女の神經にはすべてのものがさら〳〵と引かゝつた。

彼女の過去は暗い傷ましい記憶に充ちてゐた。彼女の兩親もたつた一人の姉も彼女一人を殘したま

ゝ此世を去つた、肉親の者を失ふ悲哀は彼女の心に消し難い暗い印象を止め、そして彼女を憂鬱な瞑想に導いて行つた。彼女は兩親や姉の死を自然の當然の出來事として考へるわけに行かなかつた。その人々は自分のために犧牲になつてくれたのではないか、自分が生きて行くためにその人々が死なゝければならなかつたのだ！左樣云ふ考へが更に彼女を苦しめた。そして死の深い神秘を知るために早くそれを經驗してみたいと云ふ不思議な欲求に襲はれもした。やがて彼女の心は人間の世界のいろいろなことを考へねばならなかつた。

この時代の青年の前には思想の上、實際の上に澤山の問題が與へられそして多くの若い人々は競つてその解決を急いで居た、それらの人々の立派な勇ましい主張は彼女の心を驚かすに充分であつた。彼女は半ば呆れ半ば失望してみすぼらしい自分の姿をかへりみた、自分の無能なのが悲しく口惜しく腹立しくてならなかつた。と同時に利口な世間の人々が何となく恐ろしくて近づきがたいやうにも思へた。朋達を造ることが危ぶまれて彼女は孤獨を好んで居た。一體が誰に對してもナカ〳〵打解けにくい性質で妙に偏屈なやうに人に思はれて居たのも小さい時から不幸せに生ひ立つたためであつた。涼しい初夏の風が爛熟れきつた花の花片を庭一面に散らして行く哀樂に充ちた夕暮などは殊更ものゝあはれを感じた、青葉のかげに淡く映る石燈籠の灯もしみ〳〵として柔かい情緒をそゝるのであつた。彼女は自分の小さな心に身體に耐えきれぬ程の强い〳〵壓迫を覺えて我しらず神の名を呼ぶことが屢々であつた。そして彼女が通つてゐる宗教學校の外國の尼さん達の純潔な生活を目に浮べた。

いつも同じ樣に黑い服裝をして白い頭巾をかぶつて珠數を鳴らして行くその人々のかげには何處かしら尊とい淸い趣きが見えた、會堂の鐘が正午を報らせると同時に立ち上つて「Au revoir mes enfants」

と笑を含んで云ふ聲音が彼女の心にはやさしくしみ入るのであつた。夢のやうに幽かな讃美歌の調べが聞える毎に彼女の眼には懷かしい母のまぼろしが朦朧として現はれて、「Oh ma chère fille!」とさしまねくかと思はれた、美しい樂園、其處には靈魂と肉體の矛盾もなく、我と彼との差別もなく、不死不滅の生命の焔が炎々と燃えてゐる――と思ふと彼女の感情は昂ぶつて、異常な熱誠が全身に溢れるのであつた。

とある日曜に彼女は餘程以前から信者になつて居る一人の友人と會堂へ行つてみたが重い扉を開いて室内を一目眺めた時は思はずはつと驚いた。中央の疊をしいてある座席には眞白なレースを頭からかぶつた若い女が一樣にひざまづいて居た、右手のベンチには學校で見覺えのある尼さん達がいつもはピンで止めてある頭巾の兩はしを開げて肩まで垂れてうつむいて一心に祈禱を凝らして居た。鮮らしい朝の日は窓の磨硝子にキラ〳〵と光つて、供物を捧げる司祭の紫を帶びた服裝は燦爛と輝いて居た。彼女は丁度中世期時代の美しい繪畫を見るやうな心持でこの光景を凝視て、我にもあらず恍惚となつた。

「こつちへゐらつしやい、ね」

と友達はさゝやいてずん〳〵前の方へ進んで行つた。

「あのね、いゝからたゞ私のそばに坐つてゐらつしやいよ」

彼女の友達はふくさ包の中から出したレースをかぶると兩手を組み合せひざまついて默禱に這入つた。手持無沙汰な極りの惡い妙な感情を味はひ乍ら彼女はミサの終るのを待つた、二人の少年が袋をさげて寄金を求めに來る樣子も、司祭が一人々々に聖體を授ける樣子も彼女の眼には珍らしく尊とい

やうに見えた。これと同じ光景をかつて前の世に經驗して居るやうな氣がした。

拼しミサの後に司祭が試みた說敎は彼女の柔かな感情を滅茶々々に打こわした、聖書に記されたキリストの敎訓を說くばかりでなくその奇蹟を全く肯定して居るやうに聞える司祭の主張は彼女の心を失望させ冷淡にさせた。彼女はその信仰が――自分の記憶にある昔の美しい神話が少くとも自分とはかけはなれた、手の屆かない遠い〳〵處に隔つて居るやうに思つた。そして更に傷ましい感情が起るのであつた。彼女は物思はしげな顏をして家へ歸つて來た。

彼女の机の上には進化論とか「生物學」とか云ふ類ひの新らしい書物が積んであつた、彼女は暇のある每に熱心にそれらの本を讀んだ中には近頃流行の「性」の問題についての書物もまいつて居た、が彼女はその問題を語ることを何となく好かなかつた、左樣云ふ問題に觸れることが恐ろしいやうな情いやうな思ひがした。

「私はたゞおとなしい、いゝ子になりたいと思ひますの」

と彼女はよく先生に向つて云つた、そして事實第二の親として慕つてゐる先生に何事も背くことはなかつた、ばかりでなく努力のすべてを盡して朝夕に仕へて居た、それが彼女自身の唯一つの誇りでもあり慰藉でもあつた。彼女は彼女が信賴するたつた一人の憐れみに充ちた先生を夢裡にも忘れ得ぬのであつた。不遇に生ひ立つて來た彼女は人の情を感じることも人一倍深かつた。

「先生はヨカナアンに似てゐらつしやる」

彼女は左樣思つて蒼ざめた憔れた先生の顏をしみ〴〵眺めることがあつた、彼女は先生のやうにすべての人々に深切を盡し、自分の身を忘れて他人のために働らく人をかつて見たことがなかつた。そ

して彼女はいつも先生に對する激しい尊敬の思ひを自分の心の底にあるかすかな信仰の芽と結びつけるのであつた。

「先生は本當の殉敎者でゐらつしやる」

夜おそく疲れて歸つて來る先生を見る度に彼女は左樣獨り言を云つた、そして先生の健康が何よりも案じられてならなかつた。眞白な夏衣をつけたその瘦せた姿を見るとまるで靈魂ばかりで生きてゐるやうに思つた。

「ねえ、先生人間つてものはどんな風に生きればいゝんでせう」

とある晩彼女は思ひ迫つてきいた、街の人聲も鎭まつて、電車の音が遠くひゞく可なりの夜更けであつた。書齋の窓をすつかり開け放して暗い庭の植込みを眺めて居られた先生は、

「どんな風につて、かう呼吸をして生きて居るのさ」

とパッと燐寸をすりながら無造作に云つて微笑された。

「またそんな事を仰云つて………」

思はず誘はれて笑つた彼女は訴へるやうな眼付をしてぢつと天を見据へて居た。

「自分の生きたい通りに思ふまゝに生きればいゝ」

「思ふ通りに――ぢや我儘のありつたけをしても、自分の勝手なことをしても?」

先生は默つてうなづいた、葉卷の煙が白く渦を卷く中に籐椅子の鳴る音ばかりがギイ〳〵と寂寞を破つて聞えた。

「でも左樣すれば外の人と衝突してやつぱし自分が苦しむんでせうもの、駄目です事ねえ………つま

りそこに調和つてことが必要になるのでせうか」

「その調和のうまくされたのが昔から聖人と云はれる人々だ、欲する處に從つて法をこえなくなるのだ、我々平凡な人間はなか〳〵左樣は行かないけれどね」

彼女は椅子の脊にもたれて固く口を閉ぢてゐた、いろ〳〵な錯雜した意想が一時に胸へ迫つて來て云ひたいことが自分でも分らなくなつた、もう一足ふみ入つてみたい、がそれには如何したらよいのか考へ及ばなかつた、つひに彼女はたつたひとりの深い〳〵空想の國が欲しくなつて急いで自分の室へ歸つた。そして机の前へ坐ると熱い涙が一時にあふれて來た、本箱の硝子戸にもたれて彼女は震へ乍らいつまでも泣いて夜を更かした。

彼女は毎年春から夏へ移るこの頃の時候に惱まされるのが僻であつた。彼女は自分の中に矛盾した二つの激しい力がたえず鬪ふのを感じた、いづれかゞ克ちいづれかゞ負けなければならぬその爭ひは彼女の生命が燃える限り止まぬかと思はれる程傷ましいものであつた。「調和」と云ふことが彼女には幾度か聞かされて居た、それと同じ關係が人間と人間との間に結ばれて居るのだと云ふことも尤ものやうに思はれた、がその理知の説明を一打ちに破壞する程の狂暴な情熱がいつも彼女を虐めるのであつた。彼女は世の順境に育つた、見るからに幸福らしい樂天的な人々を羨しく思ふと共に自分の運命を呪ひたかつた。

「自分は一生涯かうして苦しんで終るのだ」

と云ふ感情が彼女の心を寸斷した。

云ひしれぬ寂しさに惱む彼女は黄昏の椽端に立つて、はてしもない大空を眺めながら空想に耽ることを好んだ。立木の多い庭は鬱蒼として彼女の前にあつた、自分の心は何を求めやうとしてたえず苦しむのか彼女は分らなかつたけれど、たゞ水のやうに淸しい夕風に吹かれて、たそがれと夜の亂舞する色調の中に遠い〳〵夢の國を想ひ給くことが彼女の瞬間の快樂であつた。

――町井久子――

宵〻に露臺賑ひ夏に入る甘きなやみに我はおとろへ
小百合する病める小窓に三時近く黒き蝶あり何か淋しき
ひるがをの淡紫がやゝ疲れおのゝき見ゆるま晝野の道
玉しきのよきうなぢをば持つ子にも似たるが嬉し床の山百合
ふがひ無き我をのゝしる人語の他にあらぬと思へば悲し
長かれと祈られにける黒髮を持てる子故にあきらめをする
「あきらめ」と胸の小鳥を慰むる言葉たくみになりし此頃
裏切りて不淨に誘ふ曲者も何處行きしか波たゝぬ胸

憐愍

生田花世

村で一番大きな建築物は云ふ迄もなく小學校と寺院である。寺院は山際に寄つて、其の灰色の瓦屋根が晴れてゐる日は木立の間からいつも光つて見える。學校は隣村との境界に青々と繁茂つて村の南端を縁取つてゐる深い數丁に亘る松林の傍に建つてゐて、その運動場の三分の一位は夕陽の頃林の陰影に蔽はれる程接近してゐる、校舍は一條の棟が殆んど半丁に近く東西に眞直に走つてゐる堅固な平家建で、中には十四の敎室がある。そして高等科と、敎員室とは其の中央から廊下傳ひに前の方へ突き出た處に建てられてゐる。建つてからまだ二三年しか經つてゐないので壁板も新しく、植込等も淺く、各敎室の生徒の花壇も、高等科生の蔬菜園もまだ貧しげな整はないものだつた。それで落着いた心持を受ける事は出來なかつたが、庭の向方の深い松林が充分に其の風致を補つてゐる。

どの敎室でも生徒は一杯だつた。よくもまあ此んなに澤山の子供があるなあ。村の親達は學校を參觀して大抵かう驚いて笑ふのだつた。年々子供の頭數は增す計りなので、舊の校舍は學年毎に不足を告

げたので何うしても新築の必要があつた。けれども村の親達は直ぐにも頭に割り當てられて來る費用を恐れて、來年にしよう來年にしようと云つては延ばしてゐた。けれども到頭二部教授をしても糊塗しきれない時が來た。それで保田村長はまだ反對する者もあつた中で、取り分け何處の村にでもあるやうに、卑劣な金持の難題もあつた中で、是れだけの校舍の設計をして新築の運びを付けて了つた。それは一部の無智な村民と、吝嗇な金持から不平と呪咀の聲を浴びながら生れたものであつた。けれども今日此頃になつては誰一人もう非難の聲を忘れてゐた。戰後の不景氣、米價の暴落、養蠶の不出來等の關係から恐しく物價は高くなつてゐたので、今年建つた處の隣村の小學校が、自分の村の校舍よりは遙かに多くの建築費を要しながら然かも遙かに粗末なものに出來上つた。斯うした現實が村の人々に保田村長を褒めさせる事となつたのである。

『村長樣は先を見通してお出でたんぢや。僅二年早かつたばかりで自分等の學校は安うて良好う出來た。矢張りえらい人は違ふでわ』

然れども其の時、もう保田村長は故人となつてゐた。彼は村の人々の喜びをも、亦新築の校舍をも見ないで、卒然として永久に其の眼を閉ぢて了つたのである。その病氣は腦溢血であつた。村の人々は校舍を見る毎に早く死んだ保田村長の事を思ひ出した。そして學校の構内に記念碑を建てようと云ふ者もあつた。折々隣の郡から模範校舍として觀に來る學校長や村長があつた。

『良い學校ですなあ』

その人々はかう云つて教室を見て歩いた。

尋常科三學年乙組の受持女教師、保田幾子は其の功勢を殘した村長の娘で、女學校を出て檢定試驗に合格してからまだ間もなかつたので十二圓の俸給で毎日學校に教鞭を取つてゐた。彼女の教授法は整つたものではなかつたが、其の全精神を傾倒してゐる點に於ては誰をも凌ぐと云つてもよかつた。

初秋の訪れが松蟬の鳴く森や林の裾に立つ桔梗の葉やわれもかうの葉に涼風を見せて心の暸(はつ)きりと澄む朝々が續いた。今朝も紫紺の袴を穿いた保田がまだ朝露のしつとり殘つてゐる草の徑で裾を濕さらせ乍ら學校の方へ歩いてゐると、道の四辻で目敏く先生の姿を認めて立並んで待つてゐた三人の女生徒と一緒になつた。一度に愛らしい小さな頭を下げて女生徒達は朝の挨拶をした。

『先生、お早うございます』

皆んな保田が受持つてゐる級の子供達であつた。島と云ふ頰のふつくりと豐かな娘、吉尾と云ふ脊のひよろ〳〵と高い娘、この二人は百姓家の子供であつたが、中央(まんなか)の弱々しげに青白い顏をした髮の美しい野本と云ふ娘は登記所の吏員の娘である。いつもおづおづと臆して、人の氣を兼ねて心を惱ます、宛も蝕(むし)ばまれたやうな感じを人に起させる女兒(こ)である。其の小さな二つの眼は折々空(くう)に迷つてちろちろと悲哀(かなしみ)を織る、――それは繼娘(ままこ)と云ふ痛ましい境遇が癖づけた眼付なのだ。保田は教壇から此の悲哀のちろちろ浮ぶ野本の眼をいつも氣遣はねばならぬ日課の一つのやうに思つて見るのだつた。今も亦其の眼が泌々と縋り付くやうに見るのを保田は感じた。

三人は受持の先生と一緒に歩くと云ふ嬉しさ、――此の時代の女の兒はこんな嬉しい事はないので――にそわ〳〵して、狹い道一杯に三つの肩を擦り合はして、押したり押されたり、躓きさうになつ

たと言つては、くゞと交り交り笑つた。でも、先生が後に向いて、なに？と訊ねると、六つの眼は又一緒に他愛なく笑ひ合つて無邪氣なく立止つて了つたりした。丁度路傍の高みにまだ朝露を被つて咲いてゐる野菊の花、六つの眼はそれのやうに綺麗で素直に見開かれてゐるが、否、矢張り野本の眼は悲しげだと保田は思つた。

學校の運動場で走つたり叫んだりする男の兒の喧騷は松林の方に漂つてゐた。野萩や薄の小さな薄い綠の葉や、仄白い長い穗が、その喧騷に煽られて、さやさやと動いてゐる。林の中には幹を蔽ふ蔦の葉の上に、朝の雫がぽと〳〵と滴つたり、黃色い光線がリボンのやうに思ひも掛けぬ下草に垂れ掛かつたりしてゐる。斷切つたやうな聲で啼く小鳥、人眼を忍ぶやうな黑い蜻蛉、埃のやうな灰色の小さな蝶等、森や林は丁度生みの母親のやうな胸を廣げて植物や動物を抱いてゐる。

不圖、皆んなは立止つた。

『野本さん、一寸待つて、あの、一寸』と島が聲を出したからで。けれど保田が後に向いた時には又、島は、

『もう好えの』と云つたので皆步き出した。後に向いた保田は小さな指が敏捷しこく野本の肩のところで何かを撮んだのを見たのである。そしてそれと知つた野本がさつと赤い顏に染まつて、柔かな小さな口元がぴくぴくと顫へて辱ぢたやうに俯向いたのを見た。ひよろひよろ脊の高い吉尾は茫然何も分らないで步き出した。

三人はもう笑ふ事なしに默つて保田に追いて步いた。やがて學校の門を入り、生徒昇降口の方に離れて行く三人の後姿を見送つた時、うなだれてとぼとぼと遲れて步く野本の姿が保田の胸に鮮かに悲し

く映つた。

晝食後の一時間目は圖畫であつた。四十人に近い子供達は色鉛筆で畫帖を見ながら簡單な形體の繪を描いてゐた。保田は一人々々の机間敎授をしてゐたが、やがて野本が腰をかけてゐる傍まで廻つて行つた。靑白い頰をした野本は澤山の黑い美しい髮、――村の女の兒は十二三にもならないと、其の頃、頸の處迄で切つてゐた、――が、机に付くかと思はれる程首を傾げて側目もせず描いてゐる。そして時々小さな指を髮の間に差し入れてがりがりと痒ゆげに搔いてゐる。保田は凝乎と眼をその髮の上に落とした。と、黑い胡麻粒を振り掛けでもしたやうに蝨が這つてゐる。這ひ出したり、潜ぐり込んだりして深い山路を分け惱む旅人のやうに蝨は蠢いてゐるのだつた。見れば襦袢の襟にも一つ密着いてゐる。呆れて見守つてゐると、野本の後の席の女の兒は囁くやうに、『虱！』と云つて狡猾さうに保田を見上げて笑つた。けれどもそれは野本には聞えなかつたので、矢張り熱心に首を垂れて描いてゐる。そして辛抱し切れなくなると周章てがりがりと傷つくばかり髮の根を搔くのであつた。

堪へ難い憐愍の心持が保田の胸に油然と湧いた。其の儘に見て置くに忍びないと彼女は思つたのである。課業が濟んでから歸つてゆく子供達の間から野本を呼んで、後へ殘るやうに言つた。やがて掃除番も歸つて行つてひつそりした時、敎室の黑板の下で二人は對ひ合つた。

『先生はね、あなたの頭を一寸見たいのよ。好いでせう？』

するとと野本の眼は狼狽して悲しげな苦惱の影に曇つて小さなその肩は打擲たれでもした時のやうに竦んで了つた。でもささやかに首肯いて見せたのである。それで髮を分けて見ると、蝨は慌てて何處と

もなく潜つて影を消して了つたが、次々髮を分けると到る處の皮膚に咬み付いてゐる。汚い雲脂、臭い垢、醜い蟲が時には一塊になつて腫物のやうになつてゐたりしてゐる。『孤腫物』と俗に云ふ不潔な此の腫物が惡臭を放つてゐる。餘り酷かつたので思はず手を放して、保田は子供の顏をさし覗いた。

『野本。母さんは構つて呉れないの？』

『忙しいから』

『痒ゆいだらうねえ』

『はい』

野本は黒い机の上にばらッと二滴の涙を落した。

『あのね、野本、もつとしたら先生があなたの家に行きますからね。家に居なさいよ。出ないで……』

『はい』

『お母様によく云つて上げますから心配しないでね』

『はい』

『もうお歸り』

野本はおどおどとお辭儀をして敎室の外に出たが、その弱々しいとぼとぼと歩く下駄の音が森閑とした學校の中で、よく響いた。机には黒い涙の跡が二つ、それはまるで野本の瞳のやうに悲しげに瞬いてゐる。

圖畫の點を取つたり、其の日の事務をすまして、保田が學校を出たのは既う四時を過ぎてゐた。朝

三人の子供に逢つた四辻まで來ると、自分の家の方には歩かないで、野本を訪ねようと別の方向に足を運んだ。野本の家は木の間に見える寺院の、それの裏の谷岸に近い籔の中にある。道の傍の畑で草むしりをしてゐた老婆が、保田を見ると手拭をはづして几帳面に挨拶をした。

『保田の孃樣で、——何處へお出でなはるで』

『一寸そこまで、お精が出ますな』

『いや、何の、——祖母はんはお壯建でか』

『はい、おかげ樣で』

『父樣死亡うなりなして淋しい事ぢやなあ、既う二年にもなるでかい。此間の事のやうぢやのに』

『本當に既う二年目で………』

『祖母はんや、母さまに宜しう云うて遣はれ、其の中にお見舞に行くけんど』

『ええ、さう申します。いつも有難う』

『何の——』

そして老婆は自分の手を動かし始めた。保田は老婆に別れて細い道をぶら〳〵歩いて行つた。やがて寺院に近づいた。寺院の墓地の道路に沿つた處には日露戰爭の戰死者の立派な高い石碑が立つてゐた。その碑面の文字は保田村長の書いたものである。肉體よりも長い生命を石に刻んで世に殘つてゐる文字は父親の顏を親しく見上げるやうな思ひを娘の胸に送つた。保田は思はず長く立止つて恍惚と文字に見恍れた。

野本の家に近付くと、籔の奧の、谷の方から水の音がよく響いた。羽根を地面に擦れ擦れの小さな

鷄が一群れ、午後の弱い黄いろい日を浴びて餌を漁つてゐる。門などのない家で、道は直ぐ家の前の庭に續いてゐる。藁を澤山積上げた小家の陰で、その骨立つた細い胸にきりきりと黒い木綿の紐を縛つて子供を脊負つた野本は、赤い帶を締めたふつくりした優しい顏の島みね子と一緒に靜かに遊んでゐた。二人は保田を見ると急いで出て來てお辭儀をした。

『母さんはお居でる？』

『はい』

野本は一寸赤い顏をしながら返事をして、島とその氣遣はしげな眼を見合はした。

『御免下さい』

保田は暗い家の中に眼を注ぎながら案内を乞ふた。內庭の土が掘れて危く轉びさうに穴が出來てゐたり、隅の方では壁が落ちたり、障子も破れ煤けて、家具の少ない吏員としては餘りに貧しい生活の有樣が心を驚かした。臺所の板間で何かこつこつ刻んでゐた繼母のおしまが、その汚れた顴骨の尖つた顏を一寸擡げて、袴を穿いた保田の姿を見ると、不精さうに立上つて、垢塵の着いた黑い木綿の前垂を頻りに撫でながら云つた。

『まあ、先生樣、どうぞ此方へ』

何の用で來たか見て取らうとするやうに其の皺睍みの細い眼を保田の頭の上から足の爪先まで二度三度上げ下ろしした。締りのない口元と低い鼻とが決して根性の惡い女ではない事を自ら證明してゐる。而して亂雜な風姿と無作法な言葉とがあまり他人の感情や、幸福を認める筈がない無頓着を示してゐる。一種の野蠻な女性である。それがかなり不快を與へた。

『突然に出ましたのは……』

と保田は口を開いて、野本の此頃の不健康な狀態や、成績の不良な事に就いて、受持教師が父兄に對して云ひ得るだけの範圍で丁寧に注意をした。又今日はからずも目に付いた頭の蟲の事をも附加へた。おしまは口を少し開けて辱かしめられたやうな不快らしい盲目的な反感と、餘計な世話をと云はんばかりの無智な驕慢とをその顏に錯雜させたが、流石に言葉では禮を述べた。

『先生樣、あの娘も構つてやらうと思ひましてもなあ、ほんまに忙しうござりまして、乳飲兒がありますのでなあ』

おしまは自分の手の廻らぬのを相手にしつかり知らせようと誇張して云つた。保田はそれに同感した事を眼に現しながら、その言葉に乘じて云つた。

『では、私、今もう暇ですから、私が一寸見て上げようと思ひますが、宜しうございませうね。私さう思つて來ましたの。』

『まあ、先生樣、そんな事を、汚たないから、私が明日してやりますでわ』

『さうでせうが、いいではありませんか。それに私頭に塗ける藥も持つてゐますから』

おしまは不圖默つて黑い前垂を又撫でながら、

『それでも組枝が居りまへんから』

『唯今そこで逢ひましたが』

から保田が云つた時、開け放した裏口の戸の傍で、子供を脊負つた組枝が、みね子と並んで此方を覗いた。組枝の例の眼は遠くから保田を泌々と見詰めて嬉しげに笑つてゐたのである。その可憫らし

い顔の、生みの母親にのみ注がれる子供らしい甘える眼が、自分の眼に向いて顫へ寄るのを感じた時保田は不思議な感動に襲はれて慟悸を打つた。

『組枝さん、お出でな！』

組枝はみね子と一緒におしまに氣を兼ねるやうにおとなしく保田の傍に來て、默つて立つた。斯うする事が少し他人に、おしまに立入り過ぎてゐるかとも思はれたが、おしまの無頓着な偸り構はないのと、嬉しげにまつはる組枝の眼とは遂にかうさせずには置かなかつたのである。

『みねさん』保田はかう島を呼んだ。そして暫く子供を脊負つて居て？と訊ねるとみねは直ぐ合點づいて組枝に代つた。

『小母さん。濟みませんがどうぞお湯を沸かして――』

保田は組枝を連れて家の日陰の籔の傍に行つた。青黑い大きな南瓜の葉が盛り上つて、まだ黑い實が此處彼處から見える。みね子が櫛と鋏とを保田に云はれたとほり借りて來た。おしまは後から手拭を持つて來て、

『先生樣の子のやうだなあ、お前』かう面白くもなげに云ふと、組枝は眞赤な顏になつてみね子と眼を見合つて笑つた。

澤山の黑い髮の根に、蟻がその巣に集るやうに、黑い蟲は雲脂と垢との堆積の中に潜り込んで棘んでゐる。そんな處は風が入つて頭の皮膚が乾くだけに密生した髮の透くやうに鋏まねばならなかつた。

『組枝さん、少し髮毛を切りますよ』

『はい』と組枝は信頼してるやうに返事をした。

『組枝さん、直き生えるがな、ねえ、先生』

みね子も組枝を慰めながら、脊の子供を搖すぶつた。肥つて顔色のよい吉秋は丸い手を伸ばして紙片を玩具にしてゐる。時々みね子の髮毛を指に引掛けて、おお、痛ッと飛び上がるさげたげたさ笑つた。組枝もそんな時は笑つた。吉秋が眞に可愛くつて耐まらぬ笑が續いて組枝の唇から起つた。手に差上げさせてゐる新聞の上には十筋、二十筋の髮の塊りが黑い蟲や灰色の雲脂とともに落ちた。薄氣味の惡い遲鈍な此の蟲は蚤のやうに飛ばないので一入眼に穢なく見える。饐えた髮の臭ひはその蟲の排泄物の臭ひも交つてゐると思はれる。此んな事に不慣れな保田は間もなく蟀谷がちくちくし出して頭が重くなり胸が惡くさへもなつた。けれど組枝が凉しく清爽して來るのを喜んでゐる風を見ると止されなかつた。やがて三十分ばかりの中にむさくるしかつた頭は灑洒して髮の色艶もよくなり、組枝の小さな柔かな頰には蘇生つたやうな淡紅味が潮して來た。

『好い氣持になつた?』

『はい』

組枝は明瞭りとかう答へて、みね子の脊で跳る吉秋に其の眼を向けて聲を彈ずませて笑つた。

『あらッ、吉秋さんは。又髮を引張る!』

『先生樣、湯が沸きましたで』

おしまは裏口から黑い頰骨の高い顔を出して云つた。髮毛の少くなつた組枝を見て、組枝の晴々した明るい顔に吃驚して見守つた。

『母さん、吉秋さんが、あれ……』

氣分が快くなつたので、組枝は保田に注ぐやうな信頼の眼を繼母の方にも送つて親しい樂しさうな聲で笑ひながら話しかけた。おしまは吉秋の方を見て、こらッと可愛げに叱つた。そして湯の入つた小盥を運んで來た。保田はその微溫湯で頭の垢を洗ひ落し、荒れた皮膚に藥を塗布つた。濁つた水には蝨が垢と共に沈んで黑く溜まつてゐる。

『これは燒かぬと不可ませんわ』

保田は蝨と髮毛とで一杯になつた新聞紙を指示しておしまに云つた。

『まあ、こんなに棲ましたんかいな！』

とおしまも呆れて了つた。かう云つて嘔吐するやうな顏付をしてペッと唾を吐いた。そして草履でその唾を擦り消しながら、

『お前はん、先生に手を突いてお禮せんならん、好え氣持になつて――』

と組枝の方を見て母親らしく云つた時は、組枝は云はれるやうに保田の方にお辭儀をした。組枝は生き生きと美しい娘の子となつた。丁度開いた時の綺麗な花のやうに。

『氣持のいい事だつた』

組枝の家を出て寺院の前まで來た時、保田は獨りかう思つて笑はずにはゐられなかつた。

（大正五年六月十七日）

苺の實る頃（一幕）

岡田幸子

登場人物。

原田　久、養子――帝大醫科生。

その妻、　芳枝。

妻の母、　千代。

小山かづ、　芳枝の友。

川村明雄、　文士――芳枝の以前の戀人。

其　他。

時。　現代。初夏の午後。

場所。　東京の郊外。

原田家の裏庭、正面は深い植込にてその植込の向ふに二階建の大きな家がある。左寄りの所は廊下續きに離座敷になつて居る。廊下の終りは開戸にて母屋との通路となり、右手は小さな柴折戸で表庭と境してゐる心。其他の前面は大部分苺の畑。眞紅の實が青い葉影に澤山ある。

幕開いて後も少時舞臺空虛。風のない初夏の日ざしが苺畑に光りを投げてゐる。柴折戸の向ふにて犬の鳴く聲時々聞ゆ。

やがて、久、（二十八。近眼鏡をかけ髮を奇麗に分け紺絣の單衣に黑いへこ帶。）が小さな籠を持ちたる若き女中を從ひて柴折戸より登場。

久。（女中を顧みて）おい、皆は何してゐるのかい。早く取らうぢやないか。

女中。（苺畑の中に歩み入りつゝ）はい、只今奧樣と御一所に若奧樣もお離れの方からお見え遊す筈で御座ゐます。（籠を側におきて苺を取り初む。）

久。（離座敷の椽端に行き内に向つて、）御母樣早くいらつしやいませんか。澤山生つて居るんですよ。

はい、はい今直ぐですよ。と云ふ聲がして、千代（四十

七位。小さな丸髷、縞の單衣に帶をきちんと上品にしめてゐる。）母屋に通ずる廊下の開戸より登場。

千代。今芳枝のお友達が見えたさうでね。此方へお連れする樣に云つたがやがて來られるでせうよ。（其處にぬぎ捨て、あつた庭下駄をはき久の側に歩み寄る。）

久。（程好き所に屈みて莓を取る。）一雨降ると皆駄目になつてしまふのですけれど、丁度好い所ですね。

千代。（久より少し離れて莓を取る。）さうねえ、（女中に）お前籠はあつて。

女中。（籠を千代に手渡しする眞赤な實が少しばかり入つてゐる。）奧樣、それは澤山御座居ます。面白い樣に生つて居りますわ。

千代。早く芳枝も來ればよいのに。お前一寸行つて見て來てお呉れな。

女中。はい、（急ぎ柴折戸より出で去る）

久。（莓取る手を止めないで。）お母さん。芳さんの所へ誰れが來たのですか。

千代。おかづさんなんだよ。

久。さうですか。彼の人も未だ獨身ですねいつ迄あゝして居る氣なんでせう。

千代。此の間も芳枝が云つてゐたよ。かづさんは生涯あゝして居るのが、彼の人の望みなのださうだよ。（左手に一杯になつた莓を籠に入れる。）

久。僕はいつか或る人に聞いたのですがね、かづさんが未だにあゝしてゐるのは、以前に別れた戀人の爲だつて云ふんですよ。

千代。だつて、さきの人はもう奧樣を持つて居るのだもの。今更らそれが爲に獨りでゐるとも思へないね。世間と云ふものは、何の益にもならないのに、人の事を兎や角云ひたがるものだよ。

久。さうです。それが世間なんでせう。先日も芳さんが川村に戀してゐるなどゝ云ふ奴があつたんです。

千代。（ぎよつとして久を見る。）

久。けれど僕はそんな事を信じるには、芳さんを愛し過ぎてゐます。お母樣馬鹿な事を云ふもんですね。

千代。（無理笑ひして）ほんにねえ。

久。（ふつと手を止めて柴折戸の所を見る。）お母さん。芳

さん達が來ました。（手に摘み取つた苺を母の側の籠に投げ入れ下手に歩み寄る。）

芳枝（二十二。何となく淋しき顔立なれど、美しき容姿。赤い手柄をかけた丸髷。華美な唐縮緬の單衣に友禪模樣の帶を無造作にしむ。）かづ（芳枝と同年輩位。飾氣なき束髮。地味な御召の單衣に白つぽい帶。容貌は美しくはないが明るい蟠りのない目を持つてゐる。）の二人。何か小聲に話しながら柴折戶より登場。

芳枝。かづさんをお連れしてよ。

かづ。（久に會釋す。）今日は。御免下さい。

久。やあ、好くお出でになりました。今ね皆で苺取りをしやうとしてゐる所なんです。今年は隨分生つてゐます。

かづ。まあ、さうで御座ゐますか。（千代に近づき。）久しく御無沙汰致しました。

千代。いえ、御無沙汰はお互ひ樣ですよ。ようこそお出でなさいましたね。丁度よふ御座んした。お召物を御汚しなさらない樣に苺をお取りなさいませんか。

かづ。え〻、取らせて戴きませう。（苺の中に歩み入り、程よき所に屈む。）芳枝さん此處にいらつしやい。澤山あつてよ。

芳枝。（かづ子の側に來る。）ねえ、かづさん。此の間蛇が此の中に居たのよ。何だか氣味が惡るかつてよ。

かづ。さう。いやだわね。蛇で私は思ひ出した。クレオパトラがアスプに胸を嚙ました時、美しい女王の胸から毒蛇の口に流れ込んだ血の滴はこんな色ぢやなかつたでせうか。（苺の實を指す。）

久。（輕く笑ふ。）美しい女王の血の滴か。僕は今、こんな事を思つてゐました。一ケ月程前に大學の解剖室に、若い女の、しかもかなり美しい女の死骸が來たのです。その唇はこの苺の樣な色でした。

芳枝、まあいやね。若い女の死骸の唇にそつくりだなんて、………ねえ、お母さん、私後で喰べるのがいやになつてよ。（甘えた樣に母を見る。）

千代、ほ〻〻〻。何を云ふのだね、芳枝は。もう直にお母さんになるのに、いつ迄赤坊の樣な事を云つてゐるのです、眞實に赤兒さんが二人出來ては、お母さんがやりきれませんよ。

一同笑ふ。

かづ。あら、芳枝さんは、お目出度でいらつしやるの。

千代。えゝ、まだはつきり解りませんが、何だか、らしいので御座居ますよ。

久、ねえ、かづさん。隨分早いでせう。私達より前に結婚してゐながら、未だ出來ない人もあるのに。僕は製造が上手なのですね。(笑ふ。)

芳枝。(久に、極く冷やかに。)つまらない事云ふものぢやないわ。

かづ。ほんとうに後の雁がさきになつた格ですわ。(取つたゞけ籠に入れ。)私大變暑くなつて來ました。少し日影に行きませう。(植込の影になつてゐる所に行き。袂より手巾を出し、扇代りに胸の所で煽ぐ。)

千代。(籠にかなり取れた苺を持ちて立上り。)餘り日ざしが強いから、もうお止しなさい。

芳枝、久の二人取つた實を母の持てる籠に入れる。そして思ひ、思ひに植込の日影に來る。芳枝の久に對する態度は始終冷淡である。

千代。私はこれを持つて行つて、造らへさせますから。(かづ子に。)ねえ、お暑いでせう。

かづ。えゝ。でも今はそれ程でもありませんわ。

千代。貴方達は離れの方からお座敷へいらつしやい。私は彼方から行きますよ。

芳枝。お母様お座敷より此處の方が清々して好いわ。かづさん、もう少しかうして居ませう。

かづ。えゝ。(ぢつと考へ込んでゐる。)

久。だつて、こんな所に居たつて仕樣がない。彼方へ來給へな。

芳枝。否、私は此處に居てよ。貴方仕樣がないとお思ひなら御自分が好い方にいらつしやい。(かづ子に寄添ひ。)私は私の勝手ですわ。

久。おう、ひどく手嚴しいな。ぢや僕はお母様と御一所に行きませう。

千代。また芳枝の十八番が始つた。我儘で仕方がないね。さあ。久さんおいでなさい。

母はさつさと柴折戸より退場。久は芳枝をぢろぢろ見ながら母の後に従ふ。かづ、困つた様子で二人を見送る。

芳枝。かづさん。大變暫くお見えにならなかつてね。

かづ。えゝ、半年程、……さうね、貴女の御結婚の當日お招きにあづかつたぎり、上らなか

つたの。
芳枝。まあ、あすこの椽にかけてお話しゝませう。（離座敷の椽端に行き手を叩く。）

女中開戸より登場。離れの障子を開けて入り、座布團を二枚持ち來り椽に並べて敷き、再び開戸より退場かづ子布團の一つに腰を下ず。芳枝もかづ子と向ひ合ふて腰を下す。

かづ。（物靜かに。）私、さつきから、何故貴女があんなに、久さんに冷淡になさるのか妙に思つてゐるのよ。
芳枝。（心の苦悶をおし隱す樣にぢつと、かづを見る。）
かづ。私には、今、御結婚の當日に、涙を白粉でぬりかへした樣な青白い貴女のお顔が見えるそして、心の何處かで私はかう云ふ結果になる事を、獨り點頭いて居た樣でした。貴女を苦しめるのは何なの。
芳枝。私が弱かつたからこんな事になつてしまつたのよ。誰れも恨む事はないの。それに私にはもう子供が出來てゐる。今更どうしやうつたつて、初まりませんもの。
かづ。それ程御自分の成行を諦めてゐられるのに、久さんに對してどうしてあんな御樣子をなさるのでせう。私には解らない。
芳枝。ねえ、かづさん。私の心を今日はすつかり聞いて頂戴な。私はその爲にどれ程悶へてゐるか知れない、と云つて兄弟の一人もない私、打明けて優しい言葉をかけて呉れる樣な姉も妹も、持たない私ですもの。つく〴〵悲しくなるわ。（袂でそつと顔を掩ふ。）
かづ。貴女が今私に云はふとして居られる事はほゞ想像がつきますよ。私達があのミッションの寄宿舍で生活してゐた當時から、自修時間など貴女が物思はし氣に机に寄りかゝつてぼんやりあらぬ方を眺めてゐらした事を知つてゐる。それが何のわけか位解つてゐてよ。
芳枝。（そつと顔から袂を離す。）あの頃が私にとつて一番よかつた。それは今日の樣な日が來る事を豫期しなかつたから、よかつたに違ひないわ川村と云ふ小さい時から仲よしのお友達でやがてお互ひに戀心に變り、末は一所に暮らせるものと定めてゐた方があつたのですが、その甲斐もなく、それ迄顔も合した事のない人と、仲人が二三度往つたり、來たりしたゞけ

で結びつけられて仕舞ふなんて。世の中はかうしたものなのでせうか。

かづ、然し、結婚は何處迄も當人本位のものですもの。かうなつた責は貴女にあるわ。きつと貴女が不徹底な、どつちつかずの態度をとつてゐらしたから、第三者の手によつて事が運ばれてしまつたに違ひないわ。恐らく貴女が拒絶なさる機會も理由も澤山おありなすつたのでせうに。

芳枝。ですから、初めから私は弱かつたのだとお斷りしたわ。（苦笑す。）

かづ。弱かつたとお云ひなさるからには、過去でせう。ぢや今はどうなの。（冷やかな笑みが口元に浮ぶ。）

芳枝。（黙して足元を見てゐる。）

かづ。何か貴女は迷つていらつしやるのね。人間としてとつをいつ思ひ惱んでゐる程馬鹿らしい事はないわ。何かまた新らしく出來た波亂が貴女の胸に蟠りを造へてゐるのでせう。ねえ、他の人ぢやなし、私ですもの。お話しなさいな。え、芳枝さん。（芳枝の肩に手をかけて顔を覗き込む。）

芳枝。（顔を上げてニツコリし、肩にかけられた手を取つて、輕く握る。）私お話しやうと思つてゐながら、躊躇つてゐた事を許して頂戴。ねえ貴女のお言葉の通り、私を苦しめる事が、此の頃新らしく出來たのよ。それは私が今お話しした川村は久と夫婦になつて見ると、久とは舊くからの友達でしたの。それでしげ〳〵と來るのです。私も逢はない理にはいかないので、顔をあはせるわ。勿論さきでは何も云やあしないのですけれど、何か私にあてつけてゐる風な樣子に見えて人知れず苦しい思ひをしてゐるのよかづさん察してね。（兩手を顔に當て、啜泣す。）

かづ。それで貴女は久さんがあるのに、今でも其の方を愛してゐらつしやるの。

芳枝。私は久に對して愛はありません。けれど彼の人は愛してゐるわ。

かづ。それは罪な事だわ。それにしても貴女はそんな心でゐて、赤さんが出來たと云ふのは、何處迄も自己と云ふものがない迷ひ心を曝露してゐる樣に思へてよ。失禮な言ひ草だけれ

ど、貴女には物事の是非を判斷するだけの智力がない。無論貴女ばかりぢやない、所謂一般の女はさうですけれど、

芳枝。私は貴女のおつしやる事が、ひし〳〵と胸にこたへるわ。こんな心掛ぢや生れる子に對してもすまない事だと思ひますわ。

かづ。そりやさうですとも。もつと廣い意味にされば人の母として種族に對してすまない事でせう。

芳枝。私は少しも愛を感じない、けれども久は私を愛してゐますわ。

かづ。ねえ、芳枝さん愛と云ふものは、種を蒔いて芽が出れば水をやつたり、蟲を取つたりして大切に一生懸命育てねば、美しい花は咲かない草花の樣なものですわ。そうつと大事に育てなければ悠久不變な大きな愛は得られない筈です。

芳枝。さうでせうかねえ。(ふと思ひ出した樣に。)かづさん。川村が今日來る事になつてゐるのです。苺を取りに來る樣に久が云つたものですから。もう來る時分ですよ。

かづ。さう。私の云つた事が御解りになつたら。にえきらない樣子を見せてゐらしては駄目よ。

芳枝。えゝかうなつたからには、久との愛を大事にかけて育てる樣にしますわ。

川村明雄(二十八九。乘馬服を著て鳥打帽を被り、スパアをつけた長靴をはいてゐる。)右手に鞭を振りながら柴折戸より登場。

明雄。(芳枝を見つけて。)やあ失敬。もう苺とりはすみましたか。急いで來た心算なんだけれど。

芳枝。えゝもうさつき。取つたのよ。

明雄。澤山取れて。

芳枝。かなり取つたわ。(しよんぼりしてゐる。)

明雄。(不審さうに。)芳さん、今日は如何かしたのですか。顏の色が惡い。

かづ。あの芳枝さん、此の方が川村さんですか。

芳枝。えゝさうなの明雄さん未だ御紹介しなかつたけれどこちらが、あのよくお話しゝたかづさんです。

明雄。(帽子をとる。)あゝさう。初めまして、どうぞよろしく。

かづ。（默禮する。）

明雄。今日はもつと早く來られる筈だつたのですけれど、一所に居た學習院の小さい人が落馬しましてね。氣の毒でした。（底光りのする眼光で始終芳枝を見る。）

かづ。まあさうで御座居ましたか。そして怪我でも。

明雄。否、そんな酷い怪我もありませんでした。

かづ。川村さん、此頃は御忙しいので御座ゐますか。

明雄。否、もう半年ばかり何も書きません。書かないと云ふより、書けなくなつてゐるのです。毎日、馬を乘りまはしたり、一日の大部分をつまらない事ばかりしてゐます。（芳枝を凝視する。）

芳枝。（二人の話してゐる間何か、すまぬ面持で椽に腰を下し沈思してゐる。顔色が非常に青白い。）

かづ。私、お名前を伺つて今、思ひ出しましたがいつぞや貴方のお作を拜見しましたわ。大變力強いものをお書きなさる方だと、その時思つた事を覺えてゐます。

明雄。いやあ、何も彼も駄目になつてしまつたんです。（芳枝に。）芳さん、いつもの貴女と違ひますね。如何かして。

芳枝。（つとめて冷やかに。）えゝ、もう貴方がいつお出でになつた所で、以前の樣な私を御覽になる事はありますまい。

明雄。何故だらう。妙な事を云ひますね。（手に持てる鞭でピチリと地面を叩く。）

芳枝。私は……私は夫のある身です。

明雄。（キッとして。）さうだ。貴女は戀人に背いて人妻になつた女だ。そんな事は今更ら云はないでも解つてゐる。

芳枝。私は自分の愛を分割して二人の方に注ぐ事は出來ません。それに私はやがて母にならうとしてゐるのです。子供の父になる者を純な愛を以つて、愛さなければならないと思ひますの。どうぞ、今日限り……この苺が實る頃を最後として、此處に足踏みなさらないで下さい。私の貴方に對する一番終りの願ひよ。（泣き伏す。）

明雄。（無言のまゝ椽の前。五六歩の所を數回往來する。）

かづ。（膝の上に手を置いて俯いてゐる。）

少時靜かに沈默續く。芳枝の啜泣する聲のみ聞ゆ。

明雄。（芳枝の前に立止り。）芳さん何を泣くんです。貴女より僕が泣く可きだ。ちと役まはりが違やしないか。

芳枝。（顏を上げて凝視する。）

かづ子はつと立ちて座をはづさうとする。

芳枝。（素早く見付け。）かづさん、貴女は何處へ行かうとなさるの。此處に居て頂戴よ。私は貴女に何も隱す必要はないのですから。

かづ子無言のまゝ元の所に腰を下す。

芳枝。ねえ明雄さん、貴女の思つてゐらつしやる事を皆おつしやつて下さい。かづさんは何でも御存じなんですから、かまひません。

明雄。誰れが居たつて、そんな事はかまはない。（無理に心を押へる樣子で。）僕は今の今迄貴女を愛してゐた。君が久君と結婚した時に、ある友達などは僕に向つて貴女を賣女と迄罵つた。然し、周圍の者の爲に貴女はどうにもならない事を知つて居たから恨みはしなかつたが、それが爲に貴女を捨てる事は、到底僕には出來なかつたんです。そして時折此處に來て貴女の久君に對する冷淡な態度を見て、勝を制した勇者の樣な心でゐました。いつか貴女は此處を出て僕の手に來ると信じてゐた。けれど……萬事僕の夢は破れてしまひました。貴女の魂は私のものぢやない。最後の願ひをきゝませう。（跪く。）僕はもう行きます。再び此の莓畑も見ますまい。

芳枝。よく私の願ひをきいて下すつてね。それが二人の爲ですわ。（袂で涙をふく。）

明雄。（立上り）さようなら、芳さん。（芳枝の手をとり固く握る。）

芳枝。（俯いたまゝ。）さよなら。

明雄、かづ子に會釋して急ぎ足に、柴折戸より退場。

芳枝。ねえ、かづさん。私は新しく生れ變つた氣で、久を愛さうと思ふわ。けれど先づ私は久に許しを請はなければなりませんわ。でも許して呉れなかつたら、どうしませう。

かづ。否々、久さんは貴女を愛してゐらつしやる。許して下さらない事はないでせう。私もお願ひして見ませう、ね安心なさいよ。（優し

く手をとる。）

芳枝。私は貴女にお禮を云ふわ。苦しい心から救つて下すつたのですもの。

かづ。私お禮など云はれる理由はありませんわ。けれど貴女に私は申上げたい事があるの。それは私達、女が長い間女性と云ふ狭い範圍に重い欽鏈を以つてつながれてゐたのですが、今は人間として立派なものにならねばならない時が來ました。ねえ、芳枝さん、母として何處に一點の非の打ち所のない方になつて下さいね。

芳枝。ありがたう。貴女の御言葉はよく解りました。此の後とも力になつて頂きたいわ。

かづ。えゝ私で出來る事なら喜んでね。

開戸より女中登場。

女中。（芳枝の側に手を仕へ。）あの若奥樣、先程の苺が出來まして御座ゐますから、召上る樣に奥樣が仰せで御座ゐます。

芳枝。あゝさう。久さんは何處。

女中。若旦那樣はお居間で、貴女方のお出でをお待ち遊してゐらつしやいます。

芳枝。只今すぐにまゐりますと申上げてお呉れ。

女中一禮して、元の所より退場。かづ子微笑しながら女中を見送る。

芳枝。かづさん、私は久に逢ふのが、何となく不安の樣な恐ろしい心持ちがしますわ。

かづ。そんな事があるものですか。私が好い樣にしませう。安心してゐらつしやいよ。

芳枝。えゝ……ぢや久が待つてゐるでせうから行きませう。かづさんお上り遊せな。（椽に上る）

かづ。ぢや御免なさい。（椽に上る）ねえ芳枝さん、久さんの愛を信じてゐらつしやい。よう御座んすか。

芳枝。（ニツコリして點頭く。）

燕が二三羽高音に鳴きながら、苺畑の上を低く三度ばかり翔す。

靜かに幕。

大正五、六、一三。

吾兒と虞美人草

原阿佐緒

夜を深かみもの書き止めて入る床に吾兒のぬくみの母の淋しも

いねし兒を蚊帳にのこしてひそに倚る窓の月はも何ぞ靜けき

足もげし木馬に緒して引きありし吾兒の姿のげにもいたいけ

呼子鳥朝けの蚊帳に目ざめゐてきけば未だもおぼえぬ淋しさ

朝霧の流らふ庭の青すゝき見つゝはるかによぶこどりきく

呼子鳥今日もかも鳴くみちのくの山どよもして吾淋しめて

みち足りし戀の果ともひなげしは輝く紅（あけ）に咲きこぼれけり

つゝましく紅を含めるひなげしの青き蕾よなじかは妬たし

眞晝陽（まひるび）の光りに堪へで散るらんかひなげしの花紅きがいとしく

わが心いや靜まれば灯にい照る夜のひなげしはさ搖らぎもせず

苦しきは戀ばかりかはひなげしよいかに生くべき吾ならんかも
身じろげるわがけはひにもちるものか寂しき夜の机のひなげし
ひなげしよえをどこにだも見せざらん涙今はしゞに流るゝ
あらはなる男心の見えくれば目なるひなげし惜くゝなれるも
叔母がりゆく坂の細道いつしかに木いちごの花實となりにけ

愛のなやみ

岡本かの子

いやさらに離るゝは淋し傍に君美しふあるもなやまし
いとせめてすこし心のなやみさへ落つるものかと髮あらひけり
い、、、
しみ〴〵とまた君戀し洗ひ毛を脊に散らしつゝ打ち默す晝
なにげなく咬たる爪に口紅の薄くつきけりうら淋しけれ
後れ毛を咬へても見つわけもなくさしぐむわれを慰めかねて

いかばかり淋しきわれに思はれて君が「若さ」よ慰まざらん

かうばかり思はるゝ身になど萠すねたみなるらん、ねたみなるらん

いたづらにねたむはつらし美しふ優しふわれに戀はしめよ神

いさゝかのねたみも知らでおとなしく戀ふる故にか君は美し

いかに我がわりなきかなやあてもなきねたみにまたも君を泣かせぬ

ほう〳〵と蚊のなき出でぬ歔欷つゝふたり默せる黄昏の部屋

涙まだかわかぬほどにほゝゑみのつと美しく頬にのぼりけり

すこやかに君を思ひぬぱらぱらと白あやめ咲く夏のあけがた

停車場いでし二人の眸をまづ青々ひたす若竹の丘

乗りすてし汽車の汽笛を遠ち方の野路に聞きつゝ疎林に入りぬ

後れたる君みかへれば新らしき帽に眞晝の光まばゆし

道ばたの草にほこりのやゝ白し默して二人行く眞晝かな

握りたるばらそるの柄も汗ばみぬ都はなれて幾里來つらん

かたはらに我が悲しみも歡びも知る人あらで靜けし眞晝

淡紅くなげいだされしわが足をみつめつゝひとり病む晝の床

いつ癒ゆる病か知らず新らしき敷布をまたも更ふる床かな

戀愛と藝術

山田わか

所謂、道德に心醉して居る人達の歎聲や反對說の多いにも拘はらず、私達が今經過しつゝある戀愛生活の時期は決して破壞的のものではない、勿論、何時の時代にも必ずあるように今日に於ても隨分突飛な例外はあるが併し、日影にあるものに黴が生へたり腐敗したりしたからと云ふて、强き太陽の光りのもとに健全に成長しつゝある凡てのもの迄も黴が生へたり腐敗したりしたと思つてはならない。

私達は今、愛の生活を再建設し、改革し、そして高尙にするに努力して居るのである。現代の大體の傾向は戀愛を放縱な肉感的にではなく、併し理想化する事に因て根本的に完全に、そして自由な個性的な形にしようとして居るのである。私達が肉慾の本當の性質を知つた時には、其れは決して恐るべきものではない事が分る。私達は野生な衝動に支配されるものを攻擊せねばならぬと同時に、生を拒む禁慾主義者にも反對せねばならぬ。此の時に當つて戀愛の中の藝術的な要素は貴い使命をもつて

居る。私達が藝術的要素と云ふ時には、それは甘つたるい審美主義を意味するのでもなく、猶又、否肉感的なプラトニック愛を意味するのでもなく、併し靈肉の合致を造り出す戀愛の審美的傾向を意味するのである。戀愛は人間の衝動的反動を音調美に變じたもので、藝術も亦こゝに歸因するものである。とベルシエは云ふ。ダーウインも戀愛の中に審美的衝動を認め、美は戀愛であると云ふ大思想を云ひ現して居る。

性慾は、不幸なワイニングゲルが彼の『戀愛と審美學』と云ふ一章に於て云ふて居るように、審美的の靜觀と反對のものではない。ワイニングゲルは性慾が審美的價値を有つて居る事を否定して居るが、性慾から精神的な靜觀を推論して居るプラトーは性慾の中に神の反映を發見したと云ふて居る。その性慾の目覺めと共に精神的の創造的活動が目覺め、そして藝術的の傾向が活動的になると云ふ事、發情期に於ては各青年男女は皆、詩人であると云ふ事實は性慾の知覺と審美の知覺の間に密接な關係のある事を確かめて居る。

性慾は、第一、生命に色彩を與へ、そしてその色合と感情の中に細やかな調子を織り出すものである。肉慾がなかつたならライフは一樣な灰色となり、生存の喜び、及び創造的活動力もなくなつてしまう。或は全く無くならなくとも最少限度になつてしまう。最も理想的な戀愛でもその詩的要素と、そしてその活力の充實を欲するなら、肉慾に因て養つて置かなければならない。アンネテ●ホン●ドロステヒユルショツフは彼女の愛人レウイン●シユツキングがルイザ●ホン●ガルと結婚の約を結んだ時、彼女の詩人としての資格と藝術的創造力は失せてしまつたと云ふ。戀人に接觸すると云ふ期待が彼女の詩的活動の刺戟であつたのだが其れが不可能と定まつた其瞬間に彼女の詩想は全く枯れてしまつた

のである。

性慾と審美の間に密着な關係があると云ふ有力な證據は大藝術家大詩人は、大抵、徹底した肉慾主義者であつたと云ふ事である。是等の藝術家の知覺的審美力は熱烈な肉慾と共同して居つて、そして其れが美しいものから直接に最も有力な刺戟を受けるのである。ホン・クラフト・エビングは性慾に基礎をもたない天才と藝術と詩の可能を否定して居る。藝術と性的衝動とを別にする傾向をもつて居た、ホルケルトですら此兩者の間に屬性的關係の存在する事を拒む事は出來なかつた。審美作用の中に意志の絲が細かくなるのではなく、併し乍ら、其れは、盲目的になる程太く強くなるものであると云ふ事をオスカル・ビーは觀察して居る。ショッペンホヘルの審美的知覺の中には意志の要素がないと云ふ議論にニーチエもギヨーも反對して居る。ニーチエは性慾衝動の審美と云ふ事を云ふて居る。ギヨーは生の愛と性慾の愛の上に彼の審美學の基礎を置いて居る。マグヌス・ヒルシェフェルトはサンタヤナがネーチユーアの全體は性慾知覺の目的である、故にネーチユーアの美は性慾に依つて説明されると云ふたのに同意して居る。又ガスタフ・ナウマンは性慾は凡ての藝術及び凡ての審美學の根であると云ふて居る。

けれども性慾と藝術の關係に關して如何なる議論があるにもせよ、我々の今日の生活の特色は戀愛的幻影を缺いて居る。何となれば今日兩性間の交際の中に現はれて居る處では、この戀愛主義の度の弱ひ人達が主に藝術的に傾いて居る。私は單に求愛（コートシップ）の藝術的形としての舞踏や、或ひは人格を審美的に現す手段としての服裝や流行に付いて云ふのではない。あらゆる交際のうちに審美的要素が缺けて居ると云ふのである。

エマソンは、戀愛論に於て戀愛的藝術的要素の是等の勢力が文明的生活には要用なるものだと云ふて居る。コンラド・ランゲは『藝術の性質』に於て交際の喜びは結局性慾の衝動に歸因すると云ふて居る。勿論交際に於てはイルユージョンの力がセンシュアリテーの力を厭倒し、そしてより純粹な範圍に高められて居る事は勿論である。戀愛的の喜びは戀愛劇となり、性慾は精錬され精神化せられるものである。今日文明人の情緒生活に於て益々重きを置かるゝものはこの審美的戀愛主義である。如何となれば生存競爭に從事して居る人の生活は大なる愛のパッションを味ふ時と餘裕を缺いて居る。斯くの如き狀態に居る人の爲には審美的戀愛觀は本當のチャームであり、彼等の灰色の單調な生活に光と採色を與へるものでなければならない。最後に眞の美とは精神的美である事、意志の力と詩的活動と自由人格の表現である事を付け加へて置く。

（諸大家の說に依る）

灰

五明倭文子

一

敏は書生部屋の薄暗い隅の壁際へ机を倚せて、更紗の煎餅布團の上に疲れた腰をおろし、此頃から折々はこれで惱まされてゐる、稍水氣を持つた兩足を長く机の下に延ばした。

朝から藥局に立つて藥の調合や、電話の取次ぎや、來客の應接やを一人で引きうけてゐる彼は、午過ぎになつて主人が出かけて仕舞ふと、急いで自分の部屋に這入つて、がつかりしたように憊ふして机の前に、暫しの間を己の擅に過ごそうとするのであつた。そしてそれは彼にとつて一日の中最も樂しい時であつた、小さな錠前の付いてゐる机の抽出しを開けると、手帳や紙の重つた下から彼は一通の手紙を出して、机の上に置いた。

「妾の好きな敏さんに……」

先づ筆頭に美しい女文字で慿ふ認めてある、藤色のレターペーパーを二三枚さら〳〵と、でも忍ば

せてゐるやうにソッと兩手で持ち添へながら、敏は幾度となく讀んだ其手紙を復た讀んでゐる。

「お互に頼りも尠ない身の上、まして母にわかれた妾の此頃のさびしさ、それはあなたもようく察してゐて下さるのね、敏さん、年より賢いあなたの力にもなりますまいけれど、妾はあなたをほんとうの弟のように念つてゐますわ……」

手紙から眼を離して、敏はあらぬ方を呆然眺めたが、蒼白い柔しい頰の邊りはポーと赤らんで、うつとりと夢みるような黑い美しい其瞳、きつと結んだ紅いその唇には、抑へ切れない微笑が浮んだ。が彼は忽ちハット氣づいたように四邊を見た。けれども奥の離座敷の方から床しい琴の音がきこえる許り、そこには何の影さえなかつた。

「あなたと妾となぜもつと早くから馴ふ親しめなかつたのでせう、空しく過ぎ去つた月日を妾は今更恨めしく思ひます、これから妾のことを姉さんと呼んで頂戴、そして二人は仲よくしませうね、敏さん、あなたは妾のような姉を有つのは否ですか、どうぞ返事を下さいな」

最後に認められた文句を敏はまたヂット見てから、大事そうに封筒に納めて、彼は口の中で「姉さん〳〵」と繰り返してみた。

お孃さんとよんでゐた主人の愛孃から、不圖も馴ふした柔しい手紙を贈られて、敏は云ひようもない喜ばしさと、嬉しさとを感じた。

幼くて父に別れ、母に逝かれ、哀れな孤兒として冷たい空氣の中に育つて來た彼は、ともすればひねくれ、荒まんとしてゐた心の中に、ゆくりなくもいま溫かい人の情を知り初めたのである。

「是がほんとうだらうか、あの女がこんな手紙を寄越すなんて……」

眞實とは思はれぬまでに、敏は何時も考へてゐた。そしていぶかつてもみた。併し此春母親が亡くなつてからの一枝（かずえ）は、血統と云つては唯父親がある許りで、其父親も自分のことにのみかまけてゐるために、一枝は全く樹から落ちた猿同樣の、寂しい頼りない身の上となつて了つたのだ。今迄世話になつてゐた書生や、快く働いてゐた奉公人達も、一人減り二人減りして、日毎にさびれてゆく家の中に、一枝が談相手ともなるべき者は、全く敏一人であつた。

「敏さん、一寸これを手傳つて頂戴」と柔しい聲に呼びかけられる時、彼はどんな忙はしい用事の中にでも、それを打ち捨てゝ置いて、一枝が命令のまゝに立ち働かずには居られなかつた。又はどんなに疲れ果てゝ足の痛みに惱んでゐる時にでも、細い柔しいその聲をきゝ、其美しい笑顏を向けられる時は痛みも忘れて、おのづと心の浮きたつような愉快さを感ぜずには居られなかつた。

彼は復た手紙をしつかりと手に握つて、暑い盛りの此夏に、この手紙を受取つたそれからのことを胸に書いてみようとした。

母親が亡くなつてから、一枝はその百ケ日の濟んだ七月の初旬に、一旦荷を纏めてくるために東京へ行つた。其留守中、敏は萬事を依託されたので、彼は忠實に家のために働いてゐた。一枝は上京すると直く敏に葉書を出した。敏からも手紙を送つた、それから伊豆や房州の溫泉などを廻つてゐる間も、一枝は行く先々で、奇麗な繪葉書などを送つたりした。母もなく、姉も有たない身には女の音信を受けたのも初じめてゞあつた。何事にも綿密な彼はそれを一々繪葉書帖に挾んでみたりした。今彼が手にしてゐる手紙は、一枝がその旅からの最後の音信であつた。これを受取つた時のその夢のような歡喜を、彼は僞らず飾らずに認めて、一枝のところへ返事を出したいと思つてゐながら、終日の雜

務に追はれて部屋に返る時分は、彼は暑い盛りのたち働きに、足はシン〳〵と痛み、身體は綿のように疲れ果てゝ了ふので、五日六日はうか〳〵と過ごす中、一枝は突然に歸國したのであつた。

「どうも留守中は御苦勞樣でした、足の工合はどんな？　妾あなたが氣の毒でたまらなくなつたから急いで歸つて來たのよ」

手紙の中に見出した通りな柔しいなつかしい、全く姉の態度で一枝は旅鞄から敏が好きそうな、いろ〳〵な土產物を出して彼に與へた。

それから後、敏は暇さえあれば一枝に呼ばれて、留守中の帳簿の調べや、何か變つた出來事の談などをさせられた。一枝もまた珍らしい旅の談などを、おもしろおかしく爲てきかせたりした。

「此度敏さんも連れてつて上げませうね、それアきつと喜ぶような處が澤山あるわ、妾何時でもそう思つたの、ほんとに此次ぎには二人でゆきませう、姉さんと弟とね……」

恁ふ云つてニッコリした一枝の、その柔しい眼付をも敏の腦には深くきざまれて、今では忘れることも可能ない程になつて了つてゐる。

やがてけたゝましい俥のベルの音がした。彼は慌てゝ玄關に出た。回診に行つた主人が歸つて來たのである。

二

日每に怠らぬ墓參を今日も早くすました一枝は、椽側に立つて今にも降り出しそうな、此頃の定めない空のけしきを眺めやつてゐたが、藥局の方にまたしても怒氣を含んだ、高調子の父の聲がきこえたので、一枝は又何か敏が叱られてゐるのではないかと、小さな胸を波打たせながら、靜かに廊下を

歩いて行つた。そしてソッと藥局の扉のところに身をよせると、父親の聲が其部屋の外にまで響け渡るような、きつい調子の、そして恐ろしい無慈悲な感じを直ぐ、一枝の胸に與へた。

「お前は此頃全く增長してゐるのだ、主人に對してそれで濟むと思ふか、少し默つて居れば直ぐ生意氣になる、出てゆけ、そういふ者は自家におく譯にいかん。」

短氣で同情の薄いのは父親の常であるが、此頃のようにぢきに憤ふした荒々しい聲をたてゝ、人を叱るのはどうしたものか、一枝はそこへ出て、敏のためにわびもしてやりたいとは思つたが、初じめからことの成りゆきもわかつてゐないので、自分には何といひ說くべき道筋も有たぬまゝに、彼女は早く父親がそこを立ち去ることをねがつてゐた。

「お嬢樣。」

ツト袖をひかれて一枝はふり返ると、お針の久がこれも小さくなつてそこにゐる。

「まア お前は何時來てゐたの、ちつとも知らなかつたわ。」

「一寸此方へ被入いまし」

一枝はそこが氣懸りであつたが、何時までも立つては居られないと思つたので、久と共に茶の間へ這入つた。久は縫ひかけの派手な御召を大事そうに片よせてから、

「お嬢樣にこのお羽織は嘸お似合ひになりませう、早く仕立て上げて了ひませうね。」

と、そこに坐る、一枝はそんなことはどうでもいゝといふ風に、

「お前は村松がどうしてあんなに叱られてゐるか知つてゝ?」と訊いた。

「ハイ、それはね何でも今日お嬢樣の御部屋で琴かなんか弄つてゐたんで 御座いますよ、お留守に

ね。」

「それで叱られてるの?」

「まアそれに旦那樣もほかに何か感違ひを遊ばしていらつしつたことがあつて、そのために此頃はあんなに焦れて被入るんで御座いませうよ。」

久は四角い顔に何か意味ありげな笑ひを浮べたが、直ぐまた膝の上に眼を落していふ。

「お孃樣、あなたもこれからはお氣をつけ遊ばさないといけません、何時また二番目の御母樣がおいでになつて、そのためにどんな御苦勞をなさらないともわかりませんからね、ほんとうに奥樣のようないゝ方がどうして急にお亡くなり遊ばしたんで御座いませうね。」

一枝は此頃からちよい〳〵耳にする、父親が或る女を近い中に後妻に迎へるのだといふ、その噂を思ひ出したのである。その女は名古屋邊りから流れて來た、いづれ怪しい身もとの者で、父親とはもう數年前から親しくなつてゐた、そのために母親が一方ならず苦勞をしてゐたことなども、一枝はよく知つてゐた。

一枝は不幸な母親のその短かい生涯のうちの苦勞を、思ひやるともう〳〵氣の毒でたまらなかつた。そして自分もなぜあの棺の中に一緒に這入つて、何處の世までも離れずに隨いてゆかなかつたかとさえ考へるのであつた。併し自ら死すといふこともなし得ぬ彼女は 寧しろ少しでも母親のことを忘れてみたいとつとめてゐた。そして彼女は母親のような眞實の愛を、此身に濺いでくれる何ものかを見出したかつた。自分もまたそのものゝためには、僞りなき愛を捧げて、此枯渇し切つた胸の中に、溫かい愛の泉を漲らしたいと念つてゐた。一枝はいまその愛の泉が敏といふものによつて、日毎に湧き

たゝせられてくるのではないかと思つた。今まで大きな手でのみ撫でられ、いたはられて來た彼女は、もう自分が手を擴げて、小さな哀れなものを抱き助けたいといふような、こゝろの芽が萠しつゝあるのを感じた。敏のすべては哀れで美しく、その上に怜悧な彼を弟のようにいたはつて、純潔な愛を垂れようとしたのは、そういふ彼女の心持ちが自然にそうさせたのであつた。

一枝は起つて復た藥局の方へ行つた。がそこにはもう誰もゐなかつた。彼女は書生部屋の入口に立つたが、うしろ向きになつてゐた敏にはわからなかつた。此頃はまた一層痩せて來たらしい、彼の後姿を彼女はヂッと見ながら、まだ默つてゐた。

此時一つ、敏は細い溜息を洩らしてうしろを振り向くと、「ア」と口の中に云つて、やゝ赤くなつた面に笑みをたゝへながら、急いで机の前に坐り直した。

「いゝのよ、そのまゝで、足のために惡いからくづして被入いな。」

一枝は氣輕く云つて、自分もその机の横に坐りながら、

「今日姿の部屋へ來て何をしてゐたの？」

とやさしく訊いた。敏は復た赤くなつて、

「どうもすみません、お孃さんがお留守で何だかさびしかつたもんですから……」

「またお孃さんだなんて、二人きりの時は何んて約束しましたつけね、姿先刻だつてどの位心配してたか知れないわ、でも氣にするに及ばないこと、ねー、お父様はあゝいふ仁なんだから……」

「エ、、でも私はもうお宅に居られなくなるんぢやありませんかしら、どうもそんな風に思へて仕樣がありません。」

彼は力なくうなだれて、何か思ひ惱んでゐるやうに、恁ふ云つた。

「そんなことがあるもんですか、大丈夫よ」

と、云つたが一枝も何かそんな氣持ちがして、不安でならなかつた。そしてたゞ此儘に敏と別れて了ひたくはなかつた。

三

とある辻で俥を乘り棄てた一枝は急いで、そこの細い露路へ這入つた。黄昏から降り出した小雨が、冷たく頰に當つて處々に點じられてゐる門燈に、細い雨足が銀線のやうに光つて見えた。傘を持たない彼女は石の出た歩きにくゐ道を、急いでやう〱明るい家の前まで來ると、傘を半開きにさした細長い黒い影が一つ、そこの電柱のかげに立つてゐた。黒い影は一枝に近づいて來た。

「餘程待つてゝ？」

「いゝえ」影の聲は敏であつた。二人はそのまゝ鳥料理とかいてある家の中へ這入つて行つた。

「此家はお母樣と始終來て知つてるのに、女將がものゝわかつた女だから構はないのよ。」

六疊の奥まつた座敷の床の方に坐つて、一枝はお化粧をした白い奇麗な頰を、冷たそうな縮緬の羽織でソツト抑へてゐる。

「でも先生に知れたらまた叱られるでせう。」

「知れたつて、あなたに偶に御馳走をして上けるのに、一寸も惡いことはない筈よ、だから今晩は遠慮なく何でも澤山食べて頂戴な。」

花傘のついた電燈が陽氣な光りを部屋一つぱいに投げて、しやれた小判形の餉臺の上にはいろ〱

なものが、甘そうな匂ひをたてゝ二人の間に氣持ちよく並べられた。赤い酒も二三杯は酌み交はして、一枝も敏もホンノリとその頬を染めてゐた。

「少し庭へ出て見なくて？　あんまり熱てるから……」

「いゝ月ですね。」

名鏡のように砥ぎすまされた十六夜邊りの、丸い月が雲もない中空にかゝつて、空も下界もすべて蒼い白い光りの中に、美しく凄く照らされてゐる。さゝやかな流れの音、池の底に逃げ込む小魚もチヨロ〳〵と黒い影が眼に映る程、澄み渡つた秋の晩である。一枝は亭の端に腰をおろして、柱にもたれてゐる。白い可愛い顔が薄暗の中に浮いて、胸の邊りからさした月の光りに、荒い立縞や白い小さな足袋の尖や、長い振りをこぼれた友禪の袖などが艶めかしく、映ろつて丁度畫から抜け出した女のようである。やゝうら枯れになつたすゝきや、白い花がそこいら一つぱいに咲き亂れてゐる。敏は名も知れぬ小さな花を摘んで一枝の前に立つた。

「おかけなさいな、こゝへ……」

「エ」

おとなしく並らんでかけて、

「この花を一輪づゝ持つて歸りませう。」

と、それを渡す、

「そう、あゝ此處へ今晩來たその思出になつていゝのね、これをおし花にして何時までも取つておきませうね。」

白い紙にそれを挾んで、帶の間に納めてから、
「敏さん、お互にもしどんな遠い處へ離れ〳〵に行くようなことがあつても二人はほんとうに、姉弟よ。」
敏は默つて頷いた。そして思ひ切つたように、
「姉さん、何時までも〳〵、そのお心でゐて下さいますか?」
と力をこめて訊いた。その聲はかすれたように、やゝ震えを帶びてゐた。
「ゐますとも、きつと……」
「きつと。」
蒼白い瘦せた手に、白い女らしい手が懸ると、互に堅く握り交はされた。
永い間、使ひならされた机も本箱も、彼には一つとして名殘りの惜しまれぬものはなかつた。ものごゝろ知る頃から住み初めて、樂しいこと、苦しいこと、嬉しいこと悲しいことの、いろ〳〵を味つた思出多い此家も、今日は早や永の別れに立ち去らなければならない身となつた敏は、すべての準備も出來たので、なつかしい机の前に坐つて、復た暫らくの間靜かに考へようとした。
一枚とあの市外れの家へ行つてから、ぢきに敏は主人に暇を出されることになつた。けれども彼はそれをば豫知してゐたのだつた。從來の者に暇を出して後、來るべき此家の運命も、敏は大抵推察してゐた。そして何よりも一枚が氣の毒でならなかつた。その一枚はまた自分のことを、これから先き何處と云つて賴つてゆくべき宛てもない、そして病身な此身の上を一筋に案じて、心を惱ませてゐる。

「これがお互の運命なら、諦めるよりほかに仕様かないわ。」

一枝は涙の眼を拭ひ〳〵、敏のために温かい柔かそうな肌着などを縫つてくれた。旅で煩ひの時、服むための藥や彼の好きそうな菓子なども、その袋の中に調へてくれもした。けれども敏は最も大切だと思ふもの丈は身に堅く、近づけて離さないようにしてゐる。それは白紙を小さく四角に疊んだものである。

二人は最早や平氣で相互の寫眞を眺めたり、相互の手紙を讀んで見たりする程の、心の落ちつきを保つてはゐられなかつた。そのために、今互に遠く離れようとする身には、互の寫眞や手紙や、そして忘れがたいあの晩の白い哀れな花までも、一緒にして先刻一枝の離座敷でそれを燒いたのであつた。その黑い薄絹の破片のような、僅か許りの灰が、せめてなつかしい二人の思出草となつた、果敢ない戀に敏は泣かずにはゐられなかつた。

さびしい秋の夕の風が部屋に入ると、黃に凋んだ桐の葉がカサリと窓前の地に落ちた。彼は思ひ切つて、玄關を出たが、門の邊りまで來ると、きゝ馴れた奧の琴の音が耳に入つたので、思はず彼はそこに立ち止つた。琴は思ひなしのせいか、切々な調を帶びてゐた。敏の落ちた冷たい頰には、熱い涙が止め度なく流れて來た。彼はたまらなくなつて、そのまゝ馳け出した。(完)

邂逅

新免さかえ

珠子は自分の部屋に這入るなり、べつたりと其處に座り込むでおつた。途中で雨に逢つて濡れて來た着物を着換へやうともしないで、呪と冥目して、混亂した腦の中を統一させやうとして居た。けれども珠子の腦は、全で大切な働きをする或る一部を急に取り去られたやうに忙然として居た。伴れ立つて歩いて來て、たつた今門口で別れたSIの事が夢のやうにしか考へられなかつた。がだん〳〵頭が澄んで來ると、今夜SIと偶然に邂逅した事實が、明瞭りと思ひ返へされて來た。それと同時に何か大きな物を忘れて來たやうな、悔いと惜しさと物足りなさとが、珠子の胸に一杯に廣がつて行つた。

暫くの間、關西の方へ行つて居たSIが此の春上京したと云ふ事を、それとは無しに友の一人から聞かされた時、珠子の心にSIの名が不思議な魅力を持つて這入つて來たのであつた。『逢つて見ようかしら』と珠子は幾度か考へた。それは徒らな好奇心や氣紛れな心から起つたのでは無かつた。けれども逢へば必ず二人の心に、輕い怖れと冷かな微笑とが殘される事であらう。それは私の心が暖いか

らだ。お互の心に暗いものゝ影が秘んで居るからだ。と珠子は思つて逢ふと云ふ事がためらはれた。不圖した機會から呼び醒まされた思ひ出も、それから時と共に過去の影に薄れて行つた。珠子は今夜其のSIに逢つたのだつた。珠子の胸は其の時思ひ設けない邂逅の驚彈と、嘗て逢ひ度いと思つた人に逢ひ得た歡びと懷しさとにふるへて居た。珠子は今も、胸に手を當ると、其處に、一種の羞らひと快さを伴つた或る怖れとに高鳴つた、先刻の感覺が高い音樂でも聞いた後のやうに、心の何處かに未だ消えずに居て、其の響が傳はつて來るやうに思はれた。

……………………

赤坂見附から外壕線に乘り換へた珠子は、どや〳〵と後から乘り込む數人に追ひ込まれて、運轉手臺に近く進み乍ら、席を一順に見廻したけれど、何處にも空席は見當らなかつた。乘客の殆どは眠たさうな顏をして、驟雨を車内に逃れてほつと息ついて居る人達に席を讓り合はうともしなかつた。珠子は不圖、滿員に近い車臺の中に自分より外、一人の婦人客も無いのに氣が付くと、妙に多數の人の視線が自分許りに注がれて居るやうに思はれたので、釣皮と濡れたパラソルとに身體を支えながら俯向いて居た。其の時珠子は誰かに輕く肩先を叩かれたので、飛び上るやに其の人の方を振り向いた。電車が恰度御所下の壕端を駛つて居る時であつた。

「まあ！」と云つて珠子は驚きの眼を睜つた。

「矢張りさうでしたね。何うもよく似た方だと思ひました。」とSIは平靜に、然し、懷し想な微笑を口許に漂はして、麥蒿帽子の端に手を掛けたのであつた。

「まあ、Sさんぢや被在いませんか、隨分暫らく……」で、と珠子は其の時の自分の想ひを表現するの

に適切な言葉が見出せないで、ぼつきりと、切り離したやうに云つた。けれど其の瞬間に起つた言葉に變る複雜な表情は、SIの心にしつくりと沁み渡つて行くやうに、快い感じを與へた。

「何時もお變りが無くて結構ですわね」

「えゝ有り難う。相變らずの貧書生で困つて居ます」

「其那事を……。大層御出世をなすつたつて伺ひましたわ、さうして只今のお宅は……」

「矢來です。で貴女は矢張り以前の處に被在るんですか」

「えゝ。では直きお近くなんですわ。彼那に御近所でよく今迄分らなかつたものですわね。」

二人は何時か空席に腰を下して、斯那事を訊き合つて居た。周圍の人達は懶うさうな眼を忙然りと二人の方へ向けて、何か面白いものでも二人の上から見出さうとするかのやうな顏付をして居た。二人は弗と言葉を斷つて顏を見合はせた。お互に見探られた腹立たしさと羞しさとが眼の中で頷き合つた。

SIは眞新らしい意氣な背廣を着て居た。麥藁帽子の下から見える揉上は青くきりゝと剃込まれて、鼻下の眞黑な髭も上品に短く刈つてあつた。珠子は、自分の知つて居た頃の彼を思ひ出して居た。學校から歸ると屹度袴を整然と疊んで、髭なども三日にあげず克明によく自分の手で剃つた。思ひなし小柄な身體を氣にして、自分の風彩を調べるのに大分意を用つて居た。さうした女性的な潔癖が、今日の風姿にも、一寸したネクタイの結び目にも伺はれるのであつた。

『今もSIさんは矢張り彼の頃のやうに、女達の問題に成つて居るのかしら。彼の人の現在が知り度い。過去が知り度い』と物好な追究心が、彼の女の胸にむく／＼と頭を持上げて來た。それを知るといふ事、それは自分に取つて決して等閑りにすべき事ぢやないと彼の女は考へた。けれど又一方から

考へると、自分と彼とは遠い以前の知己と云ふ許りで、現在二人の間には何んの繋りも無いのだ。餘計な人の生活を紊さなくのもいゝのだ。とも思はれる。

珠子は過去の事を思ひ泛べると、反抗心とも從讐心とも付かない變な感情に、堪忍して下さいと云ひ度いやうな弱々しい心持と、云ひ和れぬ極りの惡さとが、ごた〳〵と一諸に成つて起つて來るのだつた。

珠子が、何の氣も無く不意と頭を上げた時、其處に思ひ掛けなく、微笑み勝ちなSIの眼が恥つと自分を見て居た。「SIさんだつて必とあれからの自分の生活を知り度いと思つて居るのに違ひ無い。」と彼女の心は滿足さうに一人言した。

飯田橋で電車を降りると、外は未だ雨が上り切らないで、生温い微雨がしきりに降つて居た。夜は最う可成り更けて居る。乘り換場所の店々も、宵の口の驟雨に客足を殺がれて、晩い夜の、來客の無いのを見越したものか、皆んな大戶を下して、一軒として起きて居る家は無く、街はひつそりと靜まり返つて居る。電車は待つても待つても、中々來さうにも無かつた。「もう亦が濟んだのかも知れませんね」「まさかさうでもないでせうが」「困りましたね」。など〻斯那會話が電車を待つ人々の間に交され出した。さうして一人減り二人減り、何時共無しに人數が少なく成つた時分、亦次の電車が客を降して行つた。

「歩かうぢやありませんか、何時迄待つたつて果しが無さ想ですよ。」とSIは軒先きに佇むでゐる珠子に云つた。

「え〻近いんですもの歩ませう」。と彼の女の答を聞くより早く、SIは線路傳いの石の上を先に立

つて歩いて行つた。何處かで借りたらしい蛇の目を肩に掛けてぐる〳〵と廻して居た。淡色のパラソルを挿した珠子は、紺縮の單衣の裾を輕くかゝげて、SIの後から從いて行つた。二人は光つた靴先と、水氣を含むで大分重たく成つた重ね草履の足元を氣にしながら、先刻の續きとも無く語り合つて居た。

「考へると隨分長くお目に掛らなかつたものですわね」

「さう……、あれから足掛け五年に成りますからね」。と彼は感慨の深さうな口調で云つた。

「あれから……」。と珠子は、彼の時の自分を思ひ返へして冷かに笑つた。

珠子は、SIに赤インキで書いた絶交狀を送つた時の心持が思ひ返へされて、出來るなら此儘、SIの眼から消えて逃れ度いと思つた。

「……それが貴女の本心ぢや無いでせう。貴女の眞の心は今いろ〳〵なものゝ影に隱されて居るのだと思ひます。貴女があゝしたお手紙を下さつたのも貴女自らの心がさうさせたのだとは僕には何うしても考へられない。僕は再び云ひます。貴女を本當に可愛いと思つたからだ、妹に對するやうな愛情が僕の心に起つて來たのです。僕は兎に角一年も續いた二人の美しい交友が、斯うした結果に終らうとは思はれませんでした。……」

珠子は其の時SIから送られた手紙の斷片を今でも明かに覺えて居る。

「皆さんもお變りに成りましたよ。御存じでせうね彼の方逹の事を」。珠子の心は其の時の事を明瞭りとして置き度いと思ひつゝも、一方ではそれを怖れて居るやうに全然違つた事を云つて居た。

「さうでせうね、僕は彼の方逹の消息は些つとも知りませんが。女の人の變化は烈しいものですからね。靜子さんは今何うして居ます。」

「彼の方は最うお母さんですよお二人の……。春さんもつい此の間御養子さんを成さいましたわ、若い美しい方なんですよ。」

「あの人達はさう成つた方がいゝ其の方が幸福ですからね。山田も何時か妻君を貰つたなんて一度便りが有りましたつけ」。

二人の間に掛けられた中心の問題はいつか遠く離れてゐたが、又知らない間に接近して來た。

「珠子さん！」と力強く呼び掛けらて、彼の女は機先を制されたやうな心持で、「奥さんは？」と云はうとした言葉を危ふく呑み込んだ。二人の瞳は吸ひ付けられたやうに暗い中でひたと合つた。珠子は自分の頭の上に急に何か、危險に似た物がのし懸つて來たやうに感じられた。けれど其の危險に打付つて見度いとも思つた。危險を冒した其處に、珠子の求むる或る物が隱されてゐるやうにも思はれる。

「あら嫌だ。お月樣が出て居るですよ、歇んだのかしら」。と珠子は頓狂に呼んで、パラソルを傾げて空を仰いだ。「矢張り降つて居るのよ。可笑しなお天氣だこと」。二人は握り合つて居た手を離したやうに、勝手な方を向き合つて別々の事を考へた。

「成る程。風も中々落ちさうにありませんね。」とSIは義理のやうに空を振り仰いだ。月の有處は判然として居ながら、其の姿は見え無かつた。忙然りと見える大きな暈の上を黑い雲が幾つも〳〵駛つて行つた。大暴風雨でも來さうな險惡な兆しが空の色に漲つて居た。歇むだかと思ふと風と一諸にバラ〳〵と一頻りづゝ雨が傘に懸つた。

それから二人は敵同志が伺ひ合つた時のやうに、自分を固く警戒しながら、何かしら探り合はうとするやうに、ぽつり〳〵とそれとも無い事を語り合つて歩いた。

此の小一時間許りの出來事を珠子は思ひ泛べつゝ、口許に無意識に輕悔を感じたやうなほゝ笑みを泛べて居た。

「何故彼の時私達は自分の心持を明かにしなかつたのだらう。二人の心が接近して來たあの時私しは傷口にでも觸れられるやうに怖かつた。さうして押しても叩いても開かれないやうな戶を立てゝあつたのだ。何んて意氣地無しなんだらう。私しは……」と珠子は自分で自分の心をぎし／＼と蹂躙つて遣り度かつた。と直ぐ其の下から、

「矢張り遊戯だつたからだわ。お互にそれを云ふのを恐れて居たんだ」と彼の女は一人言ち乍ら自嘲の心に成つて、突然に氣狂ひ染みた高い聲を出して笑つた。

けれどもあの事を遊戯として捨てゝおひ度く無いと思つた。『彼の瞬間に二人は愛し合つて居たのだ。刹那の抱擁と接吻と、其の時は一物の穢れをも交へては居なかつた。あの時の二人の心持は尊いものだつた。二人の間に作られたロマンスは何時までも生きて居る。』珠子は若い日の追懐にいつまでも生々とした眼を輝かせて居た。

——五、六、一七——

少女と自然

加藤みどり

未來は非常な力で接近して來て私等は、どうそれを拒むでも未來に打つからずには居られない。現在は未來に遠く押し隔てられて「過去」のものとなつしまう。種々樣々な波亂を織りこむだ現在は「過去」の形になつて後に殘されてしまうと、それが如何に苦しい事、悲しい事であつても、丁度詩を讀む時のやうな心持で過去を振り返る事が出來る、未來を想ふ時は一種の恐怖を感ずるが、過去を顧る時は苦痛や悲哀に對してそれを弔ふ心持になり得る。又樂しかつた事、嬉しかつた事は一生涯、何麼境遇にあつても輝しい思ひ出となつて甦つて來る。

私は其の輝しい樂しかつた思ひ出を玆に筆にして、暫く「現在」から遠去かつて見度い。

私は十歳頃迄の極く幼い頃の事を想ふと、私の其の頃の生活は全く「詩」であると思ふ。何の考へもない無心な私の周圍は只兩親の愛と、自然の惠みとがあるばかりであつた。私は今に至る迄自然に對して何とも云へない懷しみを覺えるのは生れ落ちるから人智よりも自然に依つて育まれて來て居るからである。全く自然の懷に、神の愛兒のやうにすなをに抱かれて來たのであ

る。私の重なる記憶は學校へ通ふやうになつた七歳からであるやうに思ふ。而して十歳迄——野と山の近くに住むで居たのは私の十歳迄であつた。

野の菫や蒲公英が深い夏草にかはつて、櫻も見えなくなり蕨とりも濟むで、畑の玉蜀黍や瓜や南瓜が大きくなつて、地歩がヂーと云ふ聲を出すやうになると、百姓は蠶や農で忙しくなる。田には苗が植ゑつけられて、百姓の門や椽には山のやうに麥殼が積まれ、庭には蠶の糞や桑が散らばつて、何とも云へない變な匂がして來る。それが太陽の強くなつて來た光線の中に一種の懷しい田舍の臭氣を感じさせるのである。

私の家は道より一丁も奥にあつた。道に向つた方の東だけに黑板塀があつて、南北には高い杉の立樹が並むで居た。畑は家の南の軒下から原の方へ續いてあつた。背後は桑畑を隔てゝ原と雜木林であつた。其の雜木林は限りなく西に伸び南に伸び、山道を隔てゝ北にも伸びて居た。一年中日のさゝない程に雜木の茂つたところもあつた。さうした山の中を流れて居る川の水は水晶のやうに美しく、大小多くの石には水苔が水底を暗くして居た。水のゆるくよどむだところには、灰色をした鯰が微に動いて居た。

私は長い地に引きづるやうな浴衣の袂を首のところで結むでぢり〳〵と照りつける日光をあびながら、池に流れこむ冷い清水の樋のところで、前の百姓家から貰つて來た麥藁を水に漬けて居た。池の周圍は原であつた。野薔薇の花の白く薫小藤や、薄の中には蝗に似た黄ろい小さい虫がスイ〳〵〳〵と啼いて居た。蜥蜴が池の夏草の間を其の毒々しい彩色の身體をちら〳〵と見せて居た。私は、其の美しい蜥蜴は毒であると敎へられて居たので、いつも其の虫を見ると逃げ出したいろ〳〵の昆虫が池の端に蹲つた私を取り圍むで居た可愛らしい蝶々、蜻蛉、蜜蜂をはじめとして、たまには髮切虫や玉虫、小供達から辨慶とか義經とか太閤とかいろ〳〵の名を頂戴して居る甲虫などもあつた。果ては大嫌ひな蛇や毛虫も居れば夕立蜘蛛の大きなのが杉の樹の下に巢くつて居る事もあつた。私はい

つもいつも家を外にさうした自然の中に生存して居る動物、育てられて居る植物の中にひたつて居たのである。

私は池の中に漬けておいた濕つた麥藁を取りあけて、家の方へと歸つて行つた。勿論、此の池は私の家で用つて居るので、杉並木の直ぐ南にあつたのである。

夏になると涼臺が夕顏と南瓜棚の下に置いてあつた。私の國では、夕顏（一種の冬瓜）や南瓜は軒下一間ばかり隔つたところに植ゑて其の蔓が伸びると下から長い棒を幾本も立てゝ屋根迄棚を造へる、屋根は平で石がのせてあつた。私の國では山から吹き颪す風が強いので二階家はめつたになかつた。而して家根板の飛ばないやうに石が載せてあつた。然し、それは今から二十年も昔の話で、今では百姓家の古い家の他大和葺と云ふのになつた。

私は今も懷しさに堪えぬのは、其の夕顏棚の下である。これは私の國、即ち南信濃の片田舍でなければ味ふ事の出來ぬ趣である。

「七夕や、棚から落ちた大南瓜」と云ふ句があるが、都の人には其の意味が判らないであらう。又夏の夕べの一家團欒を云ふのに「夕顏棚の下涼み」と云ふが、是も夕顏と云へば花を賞美する其の夕顏とばかり思ふ人もあらうが、花は同じで、黄昏の薄暮の裡に浮き出たやうに咲くのであるが、花が散つて間もなく、成人の股位の大さの夕顏がなる。これがむかれて乾瓢となるのである。

私は其の涼臺の上で虫籠をあむだねぢれた籠の上下の戸には附木をさしこむだ。

涼しい風が野を越え林や森を越え、畑を越えて夕顏棚に吹いて來ると、其重なりあつた葉がさら〳〵と搖れると、私の秋草模樣の浴衣に映つて居た葉紋が日の光を亂す。夕顏の葉蔭も一緒に搖れるので、チカ〳〵と光が眼の上に亂れる。私の切りさげた前髮の毛がバラ〳〵と亂れる。白い蝶と黄ろい蝶とが畑の上を高く低く舞つて居る。遠い〳〵山路の上の方から馬子の唄が眠さうに聽えて來る。私は暫く恍惚として眼前の自然の中に溶け入つて居たが、軈て退屈してしまうと、今度は門の方へ廻つて行つた。大

きな桃と梅の木の枝が兩方から交叉した上を藤が自然のアーチをなして、深い綠の葉を重ねて居る。私は其の下で、落ちた梅の實を拾つた。其の梅は大きいがいつまでたつてもにがくて食べられない、私の方ではブンゴと云つて居た。私は其の實を拾つて肉を去つて中の種子ばかりをとつた。而して前の御藏（これは村の共有の米が入つて居たらしいそれで御藏と云つたのであらうと今考へる）の前へ行つた。其處に二三人の友達が遊むで居た。私は其の御藏の石段の花崗石の上で其の種子を磨り出した。唾をつけては磨るうちに尖がつた先が段々平面になつて行つた。其のうちに中の核が見えて來た。種子の三分の一位磨り落したところを、棒切で中の核を掘り出した。私が一個の笛をこしらへる頃には、他の子供達も庭へ行つて落ちた梅を拾つて來て同じやうに力を入れて磨つて居た。間もなく誰の口にもピユー／＼と云ふ速成の笛が出來上つた。

　私等は、又それにも倦きると、今度はいつも行く山の方へと輝く綠の草を踏むで出かけた。南の原を通つて山（大きな林の事を山と云つて居た）に這入ると、白い花が方々に咲いて居た。私は夏の花と云へば何だか皆白いやうな氣がする。濃い暗綠色の葉の中から白い花が見えて居るのを、小供心に何麼に美しいと思つたであらう。私等は、山の中で先づ食べられるものを探した。山躑躅の葉が病氣の爲め丁度瘤のやうなものを持つて居た。それを餅と云つて、取つて食べると甘味がつた。又食べて甘酸ひ樹の葉があつた。其麼ものなど私等は探して歩いたのであつた。又どうかすると木瓜（或は地梨とも云ふ）もあつた。さうした獲物を得て歸りには丸い柔い草の葉を袂や懷につめこんで來た。

　夕顏棚の涼臺の下で私等は、其の取つて來たものを食べながら、丸い葉―フキヤの葉と云つた――をいろ／＼に疊むで前齒でかむで模樣をつけた、而して各々手の上に並べて一番美しく模樣のついた人が他の人のを取るのであつた。丁度其れは絞りの模樣のやうであつた。又その遊びにも倦きると野に行き山に行き草酸漿をこしらへたり草笛を造つたりした。或は又花を集

めて來ては花賣の眞似をしたりして長い夏の日を暮して行くのであつた。

夏の夕べ——私は夏の夕べを思ふと、堪えない程昔が戀しい。今も夏の夕方は大好きであるが、

川の多い橋の多い、林や森の多い私の村。二十年も前の幼い單純な私の頭腦には、全く僞りのない美しい自然が映つたのであつた。

晝の熱さもすつかり夕方の涼しい風に拂はれる頃になると私等は一しほ元氣づいて來た。木陰や軒下で遊んで居た私等は日が山の端に沈むと原に出かける。草にはもう露があがつて素足に冷くあたるのが心地よい。そこで大勢の小供が集ると、いろ／＼の遊びが始まる、今は大方忘れてしまつたが、其の一種のメロデーを持つた聲は今も耳について居る。

「何の子欲しや」「此の子欲しや」「何呉れてひとねるだ」「あんづや餅や」「あんづ眼に毒、餅ちや腹に大毒よ」「米のまんまに魚そいて」「ととに骨ある小骨がたつよ」

是は子供貰ひの遊びで、兩方の會話であるが、一種の調をなして居る。

「一つ摘むではキリ／＼、二つ摘むではキイリキリ、三つ目に日が暮れて」とか「茲は何處の細道だ、天神樣の細道だ、通りやんせ、通りやんせ、行くはよい／＼歸りにや怖い」此の遊びは東京の子供達もやるやうであるが、田舍の原の黄昏の中から子供達の可愛らしい聲が響いて來るとは趣が異つて居る。黑い夜の幕が山の方から迫つて來て、綠の原の上を子供も一緒に包むでしまう。けれど、南の空と西の山の端には未だ晝の光が殘つて、夕星がポチリと今眼醒めたといつたやうに瞬いて居る。

原で騷いで居た小供達の群が火ともし頃になると、橋の方から大勢の子供達に交つて歸つて來る。橋の上には涼しい川風が吹いて、川上の方の草叢で螢がチカリ／＼と輝き出して居た。子守達の唄ふ俗歌は細く長く水音と共に流れて行く。軈て各々夕飯待つ我家へ歸つて行つたあとは暫く野から歸る百姓達の吹歌が聽こえて居る。

私は、母を殘して父と下の弟を連れて田の澤

山並むだ北の方へよく螢狩に行つた。兩方から父の手にすがつて月の光に照らされた小徑を辿つて行くと、苗でこしらつた箒のとゞかない高いところを幾疋となく螢は可愛らしい光を放つて飛んで居た寒冷紗を張つた手製の螢籠に幾疋かの螢を入れて得意になつて歸つて來ると、母は夕飯の後片づけを女中と共に濟ませて、涼し相な浴衣を着て團扇片手に甜瓜を冷やして待つて居た。夕顏の花が暗い中に淸らかに澄むだ姿を見せて居る。何處からか笛の音何とも云へない涼味を持つて響いて來る。私は只意識にさうした夏の氣分を味つて居たのである。いや味ふ必要のない位、自然の中に溶け入つて、自然即我、我即自然と云つた氣分になつて居たのであつた。

線路

吉屋信子

お兄さま。

おわかれいたしましてから、もうふた月とそのなかばになります。私は毎日兄さまを思ひます。

病氣になつてはいけないよ、からだをだいじにおし。二とだけ、あの時おつしやつただけでございましたのね。私はなんだかもう少し多く言葉をかけ下さつたつて——ものたらないきもちになつて居ましたの、けれども今ではもうそんなことは、ちつとも思つてをりません。

兄さま。おつしやるお言葉が少ないからつて、ものたりないきもちになつたりしたのは、私のわがまゝだつたのですもの、私——ほんとにエゴイストだと思ひます。そしてはづかしいとおもひます。

あの日、さくらの花の咲きかけた東京を後に寒い北のさびれた町へ旅立つ兄さまのお胸の寂しさは、ほんたうに——私さういふことを思ふと、かうして居ても立つてもたまらない心もちになります。

兄さまに、私は惡いことをしたと思ひます。兄さまが、大學にゐらつした頃から私は、もう

たくさん御心配の種をあげてゐたのです。兄さまが、仙臺の高等學校を卒業なさつた七月に御歸省なさつた時、私はいきなり兄さまに、たくさんの惱みを打ちつけました。

あの年の三月に私を一番（私自身にもわかるほど）愛してくれたお祖母樣が天の星となつてお去りになりました。小さい頃からお祖母さんの手に置かれた私は、母にうとまれて居るといふことを、兄弟の中で私はよく知つてゐるつもりでございました。私はさびしくてならなくなりました、お祖母さんの居なくなつた家の中に私は居てはならない子どものやうに、あの頃はむやみに思ひつめてしまひました。それに、嫌な女學校の寄宿舍の舍監のこと、との二つの事柄は、たうたう私を、東京のミッションスクールに入學しやうと望む心と洗禮を受けて銀の十字架を胸にさげるといふ望とを強く起させました。

「神樣の子になるの」「マリア樣の侍女に。」私は日夜言ひつゞけました。

兄さまが、あの巴川の螢の飛ぶ夏のたそがれ、俥に荷物を積んで玄關にお入りになつた時、家中の者は皆迎へに出ました。

「忠明も今度から角帽だなあ。」

とお父さんも嬉しさうにお言ひになりました。さうした喜びに包まれた中に、ひとり、しよんぼりと愁ひに沈んでゐた、末の妹をごらんになつた時、兄さまはきつとさびしい不安なきもちにおなりになつたにちがひありません、私は、かうして、いつでも兄さまを苦しめることばかりいたしましたはね。

でも、兄さまはどんなにこの我儘なエゴイスチックの妹に苦しめられても、いぢめられても、やはりあの心いつぱい親切にして下さいましたの。ね。私——すみません。

私、兄さまに惡いことをしました。たくさん。そして、私は兄さまの脊中に重い荷をのせてしまひました。「僕が大學を出たら。」とお約束なさつたとほり、私は兄さまに重荷をおくりました。

父上の前に母上の前に、妹への責めの一切を自ら負ふて、大學生の生活から一足出たばかりの若い林學士の兄さまは、私を連れて都會へお

出になりました。
　そして、兄妹の生活のためにお金をとらねばならぬゆゑ、兄さまは、暑い炎天の路を、多くの紹介狀と林科大學の卒業證書とを、ふところにして權力ある人々の門をおたゝきになりましたはね。
　私、忘れられない、幾つかの就職口の中、臺灣と南洋の島との方は、默つて兄さまは、おことはりなさいましたのを。
「ひとりならばなあ。」兄さまは、かうお思ひにはならなかつたでせうか。
　一番望をおかけになつた宮內省の林野局の技手のことは、あのもの悲しい八雲さんの鼠色の封筒を眼の前に見るまで、兄妹を樂しい空想に近いもくろみをさせましたわ。
　サラリーは少くてもよい、二人で食べてゆけて、お前の語學のお稽古の月謝さへ出されゝばな。と安心したらしく仰つたのですもの、私といつしよに東京にゐると、いふ事實の保證をおのぞみ下さつたのでしたわ、きつと。氣に入りの兄妹の好な土地、あの代々木の原の奧――初代の邊に小さいつゝましやかな家を借りて住むことまで話し合ひました。
　けれども、あの雷の烈しくなつて木の葉が散つて初秋らしい心持を起させた、夕方あの鼠色の封筒は、すべてを暗く消しました。たつた一つ席順が上の方が採用されたのでしたはね。
　まもなく、父さんの太い字のお手紙といつしよに爲替劵が兄妹の手許へ屆きました。そしてほどなく兄さまは、駒場の教室へ臺灣の共進會出品の木材の調査のために毎日お通ひになるといふ仕事をおとりになりました、そして、親切で優しい高輪の叔父さんの家から、私だちは郊外の新築の小家へ移りました。叔母さんがいつしよに來て始めて一軒の世話をする私だちを敎へたり叱つたりして働らいて下さつたのも、あの秋の日頃のことでした。
　まもなく霜が木々の根に結んで落葉の音さみしいころになりました。兄さまは駒場まで八時の出勤に間に合ふやうに、せか／＼と底冷のする編上げ靴の紐をお結びになるのを、入口で見てゐる私は、木綿の安い靴下の冷さを思つて、

毛糸を買ひに私は電車で町まで出ました。あのニォンスの毛糸が銀色の編棒の先にかゝりをへない中に、兄さまは遠くへおいでになることになりましたのね。

電燈の下で編棒を、かたみがはりに動してゐると入口の戸があいて兄さまがお入りになりましたの。なんだか浮ない、憂欝なお顔はさびしげだつたのですもの。

『兄さんが、東京を離れて行くとしたら、どうする。』かうお問ひになりました、あの頃から、もう、遠くへゐらつしやるお心のなやみをお持ちになつたのでございましたか。——花の咲きかけた早春の日、はじめて私は思ひあたつたのでした。

『なに、百姓の子のお守りで、いつしよにうんと遊ぶから面白よ』。と仰つてお笑ひになつた時、その御ほゝえみの寂しげに見えましたこと。

そして、とう〳〵、あゝ、兄さまは私と離れて、妹を都に殘して秋田へゐらつした。

黒い鐵路を走ゆく車の窓に、茶色のソフト帽の翳のさす青白いお顔をお出しになつて、默つてゐらつした。汽車のきしり出した時、あの短かい一言を私の胸へお投げになつてそして、去りゆく車窓から後に殘る人々をごらんになりました、あの大きいお瞳が。

私の知らぬ間に、急しい〳〵旅立ちの前の日を、時間を盗むやうになさつて、西村先生や沼田先生をおとづれて、私のことをお賴み下さいましたのも、あとで知りました。まだ兄さまを見知らぬ中村先生も、その他江馬先生川浪樣生田樣も、しぢゆう私をとほして兄さまに親しみを持つてゐて下さいます。

私は兄さまのお力によつて、たゞ一すぢの幸福にすがることが出來るのでございます。

兄さま。私は、善い仕事とては何一ついま出來ません。善いものを生み得ぬのは悲しい苦しさではございますけれども、あゝけれども恥辱ではないと思ひますよ、兄さま。確な正しい選ばれたる神の路を私は兩の足に、踏んでをりますものをあゝ、路さへ踏ちがへなければ、やがて、未來と呼ばれたタイムには、必ず私の持つ善き力の生長と共に立派な仕事をなしとげるこ

とを神様がお許し下さいますと、私、信じます、かたく、かたく信じます。

父上のみこゝろに
母上のみこゝろに
地上にては背きまゐらせん。
あゝ、されど
神の領にゆきたまひし時
「むすめよ、よくこそ、つとめたれ」と
ながしたまふ御なみだを
われは信ず。　（五、六、三）

兄さま、家の戀しくなつた時、母上の御面影を夢に見た時、私はこの自作の詩句を唄つて、やるせない胸を抱きますの。

わがゆく路よ、確實なれ、正しかれ、私のために、兄さまお祈りして下さい。

いくら、燃ゆるやうな自信の力は覺えても、正しき謙讓と愛の道程を追ひゆき神の光を求めすゝみ行く者はさびしい！——あゝ、ほんたうに寂しい。兄さまに別れてからなほさら、この寂しさは强まりました。或時は、あまりのさびしさのおそふために、ぢぶんの踏みゆく生命をきざむ足跡のほろびるやうな、悲しい幻想に泣かされたこともございました。しかし、いまでは、ぐつと落付いてまゐりました、やはり私の小さいながらも正しさと善さをこめた足跡は星の光によつて永久に印されてあることを、おぼろげながらも、みとめ得たと思ひます。

あゝ、やりとげたい、地べたに這ひついても、麥の穗に冷水を食べても、踏みはづさずに行きたい！

私に力をお與へ下さいませ。神樣。

私、こゝまで書いて來たら、泪が出て泪が出て、恥しいほど流れてなりません。

兄さま、私、働きます。

私はいま、正しい永遠の美に憧れきつてをります。

きのふ、神田の本屋で、旅行案内の雜誌を買つてきました。地圖を擴げましたら、赤い色に塗られた鐵道の線路が、東京から秋田まで、うねりくねり續いてゐました。指ではかれば、紅さしゆびに、三度ばかりまたぐ間でした。この赤い色の線路を傳ふてはるぐ＼と私の心をおくります。

なやみの歌

杉浦翠子

病める身は心ほそほそぬばたまのあやめもわかぬ蚊を聞きにけり

灯も見えて夫のしばふきこゆなり病みて臥床にめざめたるかな

病める身は脊子が物言ふこゑさへも耳によろしときゝ居るあはれ

紫の色こそさめて紫陽花はわが病める間の日數へぬらし

床に起きて雨見居るなり奥庭の紫陽花にふる眞晝の雨を

奥庭に久しく咲きし紫陽花の色かはりゆく雨にぬれつゝ

いとゞしく雨にぬれゐて下枝の花はうつむく紫陽花のはな

君がさすこのうまざけに醉ひにけり君がさすゆゑ醉ひにけるかな

いかに我のならんとすらん醉ひしれて疊の上ゆ立たんともせず

醉ひしれし君をいたはりしみ／＼と我れ妻なればなげかひにけり

このなげかひ妻ならなくによそひごのなど知らめやも君し醉ふとも

醉ひしれてかへり來ませるわが脊子を涙しつゝもいたはる我れは

醉ひしれてうつゝなげなるわが夫をしみじみとしていとほしみけり

歡樂

江森笙子

雨はれて清き冷めたる空氣をばすひつゝきゝし鶯の聲
絶世の佳人とならま欲しかりき輝き充つる春の朝かな
つやつやと吹く春風のあまりにも美しくして惱ましきかな
いたづらに我からだより美しき力ぞこぼるなにを爲さんや
色白きふのまどろめる春の日の眞晝の室のなまめかしさよ
おもおもと歩める牛の脊にうつる春の光の柔かさかな
赤き酒ゆるるグラスをとりあぐる若人の眼の輝かしさよ
ふと病みて靜かに秋を迎へたり涼しき風よ水色の空
靜かさよ痛みもなくて病める身の水色の空をあかず見入れる
月光の冷めたき風にふるへつつ針の如くに身をばさすかな
思はずも足ふみしめぬ彈力のあふれくる身のうちふるふなり
みまかりし母のみ頰にキスせしと言ひにし君もみまかり給へり
十ほども藏が並びてありしとぞ聞く我が家の物語かな

一代にひとりすぐれし美婦人が生れて家に仇をなせりと

若うして美しうして伯父君は朱鞘の太刀をおばせられしさ

あはれ我れも漸く優しをとめとはなりしなるかと思ふこの頃

天と地の始めの様を思ひつつ雨の音をばききてあるかな

母の手より菓子をもらふは今もなほうれしき事のひとつなるかな

突然に林の道にたちどまり吐きいだしたる息の熱さよ

落葉はく音のきこえて清らかに静かに秋のはれわたり居り

一心に落葉をはける父の姿さすが五十を越え給ひけり

柔かき土をばふみつつ若さにぞ耐えぬ悩みに襲はれにけり

ひとり子の物言はざれば母は父に父は母にと親しみ給へり

間隔にあきれてしばし物言へる物言ひやめぬ母を見つめぬ

よく寺に詣でずなりしと咎め給ふ老たる伯母ににが笑ひしぬ

天の川天の川とてふり仰ぐひたひに秋のほのめきにけり

六月の日光をきる蜻蛉のうすき羽音のすがすがしさよ

おほゆらぐ春よほとんど歡樂にたえざる如く身をゆするかな

八十を越えても早くみまかりし母を慕ひしトルストイかな

せにをとる者を一番えらしとぞ思へる人々に罵られつつ

ああいまだ幼きやなと自らをいとしみつつぞしみじみとせる

叱らるゝ子

山田邦子

暑い日の晝頃、新しくおろしたメレンスの着物の袖を鋏で切つてしまつた吾子を見つけた。そうしてそれを私はひどく叱つた。

叱らるゝ其悲しさに泣きながら歩み來るかも足音をさせて

思ひつめ其悲しさのきはまりて泣くらむ吾子は聲もおしまず

ちよつきりと着物切りたるその心鋏を持てば湧きけむものを

同じ日の三時ごろ

お三時の何かもらふと來るらし著（しる）くも吾子の足音きこゆ

＊

かへり途此夕ぐれの町にして愛（かな）しき吾子を見つけたるかも

松　風

はろばろに松風の音をきゝにけり海ぞ彼方にかゞやきてあらむ

眞蒼なる海につゞける朝濱道松風のなかに入りにけるかも

松風の音をきゝつゝまさびしく海に向ひて坐りけるかも

松風のいよいよふかきねもころに思ほゆるかもその思ひづま

＊

はてもなくまさをき波に胸ふれて愛しつばめはとびさりにけり

＊

ぴよい〳〵とつばめふれたる初夏の波まつさをにきらめきにけり

まさをなる海に向ひてぬれつばめ光りかゞやき鳴きいでにけり

涙

山田たづ

更けた停車場の構内は廣くガランとして、何となく四邊が底寒さうであつた。志乃子は買ひ求めた切符を片手に握つて、只ほんの當座の入用の品だけ纒めてある輕い合財袋に、小形の手提げを持ち添へながら、只一人ふらりと三等の待合室へ這入つて行つた。着古した銘仙の單衣の袖口から僅かばかり紅の這入つたメリンス友禪の襦袢の覗いて居るのも媚かしくとは見えぬ迄に薄ら淋しく、これで此儘都を的もなく追はれて行く漂泊の人でゝもあるかのやうに、何となく自然に差含まれて來るやうな心地がする。

待合室には終列車を待つ人達が、何れも氣疲れたやうな顔附をして、ごろ〳〵と汗染みたやうな服裝を倚架に凭つかけて居た。志乃子も合財袋を其處に卸して、倚架の上に落着いて見たが、發車の時間には未だ少し間がある。彼女は少し疲れの見えかけて來た身體をぐつたりと背後に凭らせながら、ぼんやりと何を見るともなく、只ざわ〳〵と動く人影を幻のやうに眺めて居たが、其間に彼女は又ふ

いと立上つて、殆ど何等の意識もなく、恰度夢遊病者のやうにふら〳〵と其邊を歩き出した。志乃子は今自分が何を思ひ泛べてゐるのやら自分で自分が判らなかつた。今それを案じて歸つて行く郷里の母の病氣の重態であることや、または昨日まで、二三日の前まで、つい先刻までいろ〳〵と話し合つたり、行動したりして居て何かの交渉のあつた周圍の人達のことや、其何れもが今自分の念の中にあるやうでもあり、又何にもないやうな氣もする。自分には今意識はあるのであるが、其意識の上には濃い煙のやうなものが幾重にも厚く〳〵してゐて何だか其意識を朦朧と曇らせて仕舞つてゐる。屹度自分は今激く疲れてゐるのだらう、彼女は左樣思ひながら、未だ新しいコンクリートの上を輕い駒下駄の音をコト〳〵とさせながら當度もなく步き廻つて居た。

志乃子はまた不圖立停つて、所在なさに殆ど無意識のやうに其處にある手に當つた新聞を開いて見た。と、彼女は覺えずふる〳〵と胸を顫はせた、今迄眠つたやうに昏く成つて居た意識が急にカッキリと闇から明るみへ出て來たやうに眼覺めたのであつた。それは、彼女の手にした其或新聞には彼女の戀人の名が消息欄に一寸見えたのである、別に何でもないことである、これが平常なら別に氣にも留らないのであるが、今此土地を、其戀人の住むで居る土地を假令數日の間にせよ、百數十里の向ふへ離れて行かうとして居る今は妙に怪しく胸が顫へる。何だか最う永久に逢へなく成らうとして居る戀人の名を不圖今此處で文字に見出したやうな——また最う幾年かの過去になつた人の消息を圖らずも聞いたやうな、ほんの一昨日の夜別れたばかりであるのを、

『では明日の朝、早く歸る?』

『未だ判らない、未だ私の心に定まつて居ないの……』

『如何して？』
『如何してゞも、そして誰にも送つて貰はない、お友達も皆斷つて仕舞つたの、そして只一人で淋しく歸りたい。』
『何故？』
『何故でも、只左樣云ふ氣持が所好だから。』
『詰らないことを言つてる』と、戀人は暗の中に白い齒を見せて微かに笑つた。
『だけど何だか私歸るのが可厭だ……』
『如何して？直ぐ歸つて來るのぢやありませんか。』
『えゝ、ほんの五六日、長くて十日、けれど何だか最うこれで永久に歸つて來ないかのやうに私は淋しい……』
二人は夜店の出た賑やかな町の灯が、人蒸れにぼうと燻されたやうに濁つて居る雜沓した町を暗い靜かな闇に遁れながら、沈澱んだ其暗い闇の層が、ひつたりと水のやうに熱した頰を襲ふ感觸を心地よく味ひながら斯んな會話を交はしたのであつた。
彼女はじつとそんなことを思ひ泛べて居ると、緋桃の蕾が溫かな春の日影にぽつと柔かにほぐれて行くやうに、全身の血管が和やかにふくらんで來るやうなのを覺える。彼女は今最う何にでも可い、木にでも石にでも可いから矢庭に何かに縋り着きたいやうな感情の激動を覺えたのであつた。
ガラン〳〵と振鈴が發車に近いことを知らせて、待合室は一しきりざわめく。隣に腰掛けて、先刻から何か頻に志乃子に話しかけて居た老爺は『こら神戸行の知らせですか知ら、まだ少し發車には早

いやうですがなあ』と、上方訛で言つた。志乃子は先刻から此男の問はず語りで自分と同國なのを知つたのであつた。

『姉さん此處に居るのは私の伜でしてな、此奴が江州迄行くのです。日野の近在でしてな彦根から乘替へるのです。斯んな年の行かない者の一人旅ですよつて何卒よろしく』と、老爺は隣に掛けた十四五の男の兒を指示しながら、荷物を持つて立上りしなに叉頭を下げた。

汽車は蟲の音の聞える初秋の野をひた走つて行く。志乃子は何となく咽び上げるやうな心地で窓に額を宛がひながら、露を含んだ冷やかな夜風に後れ毛を靡かせて居た。列車は轟々と單調な音を響かせて、闇の中を突切りながら野を去り、畑を過ぎ、林を横ぎつて行く。志乃子は遠近に丹波鬼灯を並べたやうに闇の中に濕んだ赤い色を滲ませて居る人家の灯を見てさへも旅愁をそゝられたとでも云ふのか妙に哀切な念に胸が絞られて來る。あゝ今宵は何として斯んなに感傷的になつたのだらう――やがて志乃子はつと貰ひ涙を收めて背後に居る其青年を振向いて見た。今此青年は何んな心持で居るのだらう――彼女は先刻の停車場での光景を眼に泛べて見た。何處かの學校を卒業して鄕里へ歸るらしい其青年の大勢の元氣の好い同じやうな青年達の見送人の中に不圖美しい一人の若い女が見えた。肩揚を取つて居るから九か二十位には成るであらうが、小造りなので未だほんの七位にしか見えない。それに其容貌が至つて美しいのに其服裝は最う少し時候には晩い絞りの浴衣の、それも幾度か水を潜つたらしいのに、メリンスの帶の古びたのを締めてゐるのさへも何となく哀れな野邊の花でも見るやうに可憐らしかつた。そして其娘の美しい眼は一杯に露を含んで、白い頰は涙の痕に輝いて居た。其傍には母親らしい年老つた女が附添つて居て、お下髮に結つた妹らしい女兒も居た。樣子で此娘は其青年の

人下宿の娘らしくも思はれる。そして其娘は母親が少し傍へ隔つて居た間につと窓側に寄り添ひながら、『ねえ、加島さん』と、細い聲帶の斷ち切れさうな顫へた聲をして言つた。『何時貴方はお郷里へ着くの。』思ひ餘つた心情の中から漸とこれだけが言葉に出たのであつた。

『う、うむ』と、言つたきり青年も言葉はなかつた。

やがて發車の汽笛が怪魂しく鳴る、『では暫時は逢へないよ、少くも二三年位は』と、青年は帽子を振りながら友人達の方を見て言つた。娘も覺えず動いて行く列車を四五歩追つて來たが、其儘柱の陰になつて、其姿は人込みの中に消えて仕舞つた。あゝ時は二人の間を裂くであらう、女もやがては忘るゝともなく此男のことを思ひ捨てゝ又人の妻にもなるであらう、志乃子は無殘な人の足跡に蹈み躙られて行く可憐な野邊の花が憐らしくてならなかつた、そして彼女は思はずも鐵路の上にほろ〳〵と涙を瀉したのであつた。

『あゝ、如何して今夜は斯んなのだらう』と、彼女は不思議に思ひながらも何だか自然に、殆ど涙線が切れでもしたやうにじり〳〵と涙が瞼を溢れて來るのであつた。左樣して彼女はそれが嬉しくつて耐らなかつた。『私が泣く……私にも斯う云ふしほ〳〵とした處がある』と、彼女は泌々と思つた。或男は言つた。『貴方に戀する位詰らないことはないでせうねえ、一體貴方は情熱的な人ぢやない、が底に非常に強い處がある、其強い力で押して行かうとするからそれが情熱的にも見えるのだけれど――』と、或時に志乃子を評したのであつた。『貴方を戀するなら理解しないで戀するか、それとも未だ貴方を理解することの出來ない若い男でゞもあるでせうねえ、貴方の心持に少し突進んで行かうとすれば屹度直ぐにひやりとした堅い者に突當つて彈き返されて仕舞ふ、それが男には一番可厭なことだと思

ふ』と、其同じ人が言つた。また彼女の戀人も或時に斯んなことを言つたのであつた。

『貴方の一寸見た印象はコケチッシュだよ、だけど一時間も話して居れば最う口說いて見やうなんて氣はなくなつて仕舞ふね』と、戲れたのであつた。彼女にはそれ程生硬な、一寸他人の突入り難い處がある、彼女は自分ながら自分は可厭な女だと思つて居る、可厭な女だと思はない迄も感じの堅い女だと思つて居る、何時ぞやであつた。或時、或處で、或人達が集つた席上で戀の話が出た、其時に不圖志乃子は言つた。『私は、若し私に戀人があると假定して、其戀人が何れ程迄に私に犧牲を拂つて吳れるかそれを見たいと思ふ、自分自身は何も盡さないで――』と、其處に居た一人の男が『自惚が强いな、僕は貴方の戀人になんかならないで幸福だつた』と、混ぜ返したので、一座の人達も皆薄笑ひしたやうなまじ〳〵とした顏で彼女を眺めたのであつた。

『貴方には毒婦の心持が解るわね、別に惡い意味で云ふのぢやないけれど――』と、其處に居た友達の一人が言つた。彼女も其意味を解せないではなかつたが、只何とも言はずに其顏を見返して居た。

『左樣ね』と、彼女は少時して言つた。『私は、ひよつとしたら私の性格には犯罪性を帶びて居るかも知れない、別に犯罪と言つた處で泥棒したり、詐欺したりすると云ふのぢやないけれど、若し自分を生かすのに最も都合の惡いと思ふ者があれば、私は或はそれを害して仕舞ひたいと思ふかも知れない、がそりや事實として云ふのぢやない、勿論私は左樣云ふ實行には懸らない、私はそれ程薄弱でない、が、其意志だけは或時、或場合には持つかも知れない。』

――と、少時して又彼女は續けた。

『一體犯罪と云ふものは自我の極なのね、だけど私は左樣云ふやうに自分の心を制し得ないで犯罪を

犯した者があるとすれば、それは强いんぢやなくつて、寧ろ弱いんだらうと私は思ひますわ。心が均衡を取れて居なくつて非常に薄弱な處があるんだらうと、詰り一種の病的ね、左樣云ふのになると矢張精神病だと云ふんでせう。』

『野村さんが言つて被坐したわ、貴方に左樣云ふ傾向があるつて』と、また其友達が言つた。

『えゝ、彼の方は好く左樣仰有つたのよ、それに私があの野村さんへちよく／＼上つた時分は大變病身だつた頃でせう、だからあの神經質な野村さんが左樣お考へになつたのも無理はないわ、私の悒鬱な顏を見ると、何かに脅かされて居るやうで不安で耐らないつてね――』

『そりや』と、友達は考へを又前に戻しながら言つた。『私は貴方の左樣云ふ自己的（エゴイスチツク）な心持はそりや理解出來るわ、だけど同感はしない、私は最つと廣い愛に生きたい――』

志乃子の心持は殆ど或時は危險だと思ふ迄に自己的である、彼女は若し自分の戀人である人が自分の意志で動かせなくなつた時は、寧ろ害して仕舞ひたいと思つてゐる、それは瞬間の滿足でもあり、又永久に自分の意志のまゝになるべきものでもある、彼女は自分で何時もサロメの心持に同感出來ると思つてゐるのであつた。併し彼女の左樣云ふ氣持が他の場合に於て顯れるのではない、只戀に於てのみである、で彼女の執着はそれ程迄に强いのだとも云へる、他人に犧牲を拂はせやうとして居るそれだけ、矢張自分自らも犧牲を拂はうとしてゐるのである。

『貴方は私を愛しやうとはしないで、强迫ばかりして居る』と、或時に彼女の戀人は言つた。本當に事實左樣であるかも知れない、彼女の戀人に對する愛は何ものにも増して强いそれだけに、又何とも云へぬ一種の憤懣の情が附纒ふ。强い愛と背中合せに强い憎しみの心が走る、それは求めやうとする心

が求め得られぬまゝに、其求め得られぬ遣り場のない心はやがては其戀人を苦しめて滿足しやうとするのであると思つて居る、自分には感情の倒錯がある、そして自分の愛は病的であると彼女は常に思つて居るのである。

其自分が今他人の別離を見て泣く、彼女は不思議であつた。左樣して嬉しかつた。自分にもそのやうな、露を含んだ秋草のやうなしほ〳〵とした心持のあるのが――

夜更けて、雲が晴れたのか高い空に月が見えた――小さな圓い銀色の月が鱗形の雲の間をしづ〳〵と進んで行く。恰度波間に泛んだ銀の圓盤のやうに――と、同時に森も山も野も草も、其明るい輝かしい月の光に照らされて一樣にくつきりと描いたやうな鮮らかな輪廓を描き出した。最う列車は餘程進んだのであらう、客車の人々は富士が見えると云つて騷いでゐた。

濱松邊りで夜が明けた。

何時の間にか又小雨がしぼ〳〵と車窓を打つて居る、曇つて居る故で却々剝がれなかつた遠方の濃い靄もいつかうすら〳〵と離れて、眞萩だの、白萩だの、女郎花だの、紫苑だのゝいろんな秋草が何れも重さうに雨を含んで、しほ〳〵と素直な女のやうに頸垂れて居るのが眼に這入るのであつた。志乃子は洗面所で顏を洗つて來て、又元の席に落着いた時、背後の青年の聲が聞えた。

『昨夜下宿のお主婦さんが海苔卷を拵へて呉れたが、惡くはなつて居ないかなア』と、傍に懸けた、これも何處かの學生らしい青年を省みながら獨言のやうに言つた。志乃子は不圖今眼に入つて居る頸垂れた秋草のやうなしほ〳〵とした昨夜の娘を思ひ浮べた。そして又何とも云へぬ哀れさに胸が塞がれたのであつた。

彼女は此近頃の自分の素直な氣持が不思議なやうであつた。が、事實彼女は眞實に、素直なのびやかなしほ〳〵とした氣持に成つて居る、これは自分が弱くなつたのだらうか、又廣くなつたのだらうか——彼女は近い頃其戀人に斯んなことを言つたことがあつた。『私は只貴方を愛するが故に愛して居る、其他に何の意義もない、私は貴方の藝術を愛して居るのでもない、貴方の思想を愛して居るのでもない、そして又貴方と云ふものを理解して愛して居るのでもない、私の愛は盲目だ、そして只貴方と云ふ渾然とした一つのものを愛して居るのだ』と。そして、又言つたのであつた。『思想の理解のないものに愛は成立たないなんて嘘だ、眞實の愛と云ふものは最つと〳〵そんなものを超越した處にあるのである』と。『當り前ぢやないか、未だ思想だの何だのとそんな事を考へて居たの』と、其時に戀人は彼女に嗤いたのであつた。

近頃の彼女はそれが始終と云ふのではないが、少くも戀人の溫い心持に抱かれて居る或時間だけは、殆ど自我と云ふものをなくして、只戀人の意志の中に人形のやうになつて居る自分を見出すのであつた。そしてそれに屈辱は感じないで寧ろそれを幸福に感じるのであつた。

志乃子は列車が停車する毎に白いペンキ塗の板に掲示した驛の名が次第に故郷に近附いて行くことを半ば意識しながら、そして弟の病氣を案じ煩ひながら、いつかまた左樣云ふ念に引き入れられて恍惚とした感情に醉つて居るのであつた。——

日記の中より

村岡たま

ほんのちひさなものが書けないで私はいらいらして居た、それは私が眞實に心より書きたいものではなかつた、書かねばならぬ義務の故に書かねばならぬものであつた、それ故に又私の心は一しほ苛立しさを増したのである。一行書いては消し二行かいては破りして、いつまで机の前に座つて居ても私の頭からは何の面白いことも浮び出なかつた。晴れ晴れと明るい心に成らねば書けぬ事柄を思ひつゝ、私の心はその反對に暗く重く沈んでいつた。すこし戸外の新しい空氣にふれて來よう、さうしたら又心持が變るかも知れないと私は思立つた。

戸外にはしと〳〵と雨が降つて居た。格子戸を開けて澁蛇目の傘を半分ひらきかけた私はふと、もはや晩の仕度に取かゝる可き時間に間もないこと、それまでにぐつ〳〵と煮こんでおくべきもののあることを思ひ出した。私は傘をたゝんで格子戸をしめた。それからお勝手へ行つて、切るべきものを切り煮るべきものを弱い瓦斯の火にかけて、その瓦斯の火の弱さを確めて、妹のKがうたゝねをして居る枕もとに立ちながら煮物のことをたのんだ。

『一時間ほど歩いて來ますからね、かけてあるお煮物がこげつかないやうに見て頂戴。弱火で

ぐつ〳〵煮込むんですから間違はないでね、そしてやはらかくなつたらおしたじを少し注しておいて頂戴』

Ｋはうるさげ氣に寢返りを打つて、うゝんなによと突慳貪な返辭をした。それは今に始まつたＫの態度ではない、いつどんな時でもＫの口から可愛らしく素直な返辭を受取つたことのない私ゆゑ、今更らしくそれを悲しむにも及ばぬのに、私の心は曇つた。しかし私はそれを押しかくして、Ｋの心持にさわらぬやうに氣をつけながら、再び同じことをくり返した。うるさいわねとＫは答へた。

私はしばらくＫの枕もとに立つて思案してゐた。もう煮ものゝことはＫには賴むまいと、一度は思つた。しかしさうすれば戸外へ出ることは出來ない。戸外へ出ることも止めようかと思つた。けれどこの重い頭を、曇つた心を何に紛らさう――私は一緒にすむ人々に出來るだけ暗い顏を見せたくない、苛々した樣子を見せたくない、矢張り戸外を歩いて來ようと思返して、私は又Ｋにたのんだ。

『お願ひですからそんなこと言はないで見て頂戴よね、恩に着るわ私』と、賴みつゝ何故か私の聲は曇つた。私の胸はしめられたやうにあつくなつてゐた。なんて泣蟲の私なのか、こんな心弱いことでどうなるのかと、自分で自分を叱りつゝやつぱり私は悲しかつた。今少しＫが思遣りをもつてくれたら――とひとつの心が呟いた。さうぢやない、自分でなすべきことを人にたのむ自分がいけないのだ、妹だと思つて强ひる私がいけないのだ、快よくしてあげるといつて貰へるまで溫和しく賴んで見ようと、私は出來るだけの優しさを持つて、言葉をひくゝしてたのんだ末に、あゝわかつてよといふ返辭をやう〳〵得て、戸外へ出た。

家々の瓦と樹々の綠とをしとゞに濡らして、雨は細かく降つて居た。私はつね〴〵自分でも解らぬ程雨が好きである。少し位の心の苛立しさは雨のふるのを見て居ると、いつも知らぬ間に消えてしまふのであつた。七日も照る日ばかり續けば、私の頭も身體も苛々と苦しくなつてくる程であつた。それなのに、今日ばかりは雨

の中を歩きつゝも心は壓されたやうに重く悲しい。Kの態度と書かねばならぬものゝことゝが入り交つて、どんなに心の注意を他の事に向けようとしても駄目であつた。私はともすれば人に手頼りたがる自分の心を、自分で悲しく思遣りながら歩いてゐた。私はどうしてKをとがめるのだらう、私の心には何故Kの心も思遣つて、さぞ面倒臭いだらうによくしてくれるといふ心がわいてこないのか、何故始めから、これ位のことはしてくれてもよささうなものなのにとばかり思つて、して呉れぬKをうらむ心地にのみなるのであらうか。Kは家に居れば父母の秘藏娘である。横のものを縦にするだけの些細なことにさへ、Kは指も染めずに居られる身である。言ひたいことを言ひ、したいことをして心のまゝに育つて來たKが、學校へ通うために遠く父母の膝もとを離れて、私達と共に暮して居ればこそ、可厭な走り使ひにも行つてくれ、勝手もとのあと片づけ、私が床に就いた時には御飯の仕度もして呉れるのである。たとへ不平をこぼしながらしてくれるにしても、してくれるさいふことそのことに對しては、私はどんなに感謝せねばならぬか知れはしない。Kに取つては、働くといふことはどんなに可厭な、したくないことであるか知れないのに、それを敢てしてくれるの故、Kの心では大變な働きをしてゐるやうに思ふのも無理ではない。Kだとて、したいといふ意志は持つて居るのである。誰だとて他人のためにしてやつて他人を喜ばすことを可厭だと思ふ人はあるまい。他人に喜ばれるのはどんな人にとつてもうれしいことであらねばならぬ筈である。他人を喜ばすのは自分が他人に喜ばせられるよりも嬉しいことに相違ない。どんな人の心にだとて、その底を割つて見れば他人のためにして遣りたいといふ心地が、必ずかくされてあるに相違ない。Kが、してくれる意志をもちつゝその意志が私へ通じないのは、Kの發表の仕方もわるいには相違ないが、それよりも私の心に思ひやりがなかつたからであつた。思ひやりのないのはKではない、反つて私であつた。

あゝさうだ、思ひやりのないのは私であつた。

私の感受性は何といふにぶさで動いてゐたのであらう、私はのんきであつた。もう再び、私はKの前に怒つた顔を見せまい。その時その時の氣分に支配されることの、可なり激しい私である故、いまかく思ひつゝやはりKに對して反感をもつ時があることを今から豫想されるけれど、そんな時にも決して私はその反感をそこへは出さぬことに努めよう。そしてそれは決して無意味なことではない、それによつてKの心がだん〳〵と女らしい優しさを持つて來、私の心が明るくなつてゆくべきことが豫想される故に——いまこれから家へ歸つて、たとひKが私の賴んだ事をしてゐてくれなかつたにしても、Kをとがめることはしまいと、私は自分の心に誓つた。私の心はかるくなつた。濃みどりにぬれそぼつた樹の葉を眺めながら、私は家へ歸つて來た。

Kは、私が出た時と同じやうに寢てゐた。しかし眼は開いてゐた。

『私のたのんだこと、しておいて下すつた？』と、私はきいた。

『えゝ』と、Kは相變らずうるさげに答へて彼方を向いてしまつた。

『さうを、どうも有難う』と、心から禮を言ひつゝ勝手もとへ來て見ると、そこにとろ〳〵と燃えてある可き筈の瓦斯の火が、ぱつたりと消えてその上に黑くさびしく煮物の鍋がかゝつて居た。

『あら、火をとめてしまつたの』と、勝手もとから私は大きな聲を出した。

『だつて姉さんがわるいのよ、あんまり火を强くしておくから焦げついてしまつたぢやないの』と、Kの聲ははぢき返すやうなひゞきをふくんで聞えて來た。

『だからさつき——』と、思はず知らず言ひかけて、私ははつと氣がついた。心の中ではもうすでに、それなればこそくどくど繰返してたのんでおいたのにといふうらみが、ものをいつてゐた。

何といふ私なのか——私は自分で自分が悲しくなつた。いまのいま決して再び怒るまい、Kの行爲に不足を持つまい、Kの心を思ひやらね

ばと心をきめて來たのに、もうKの行爲をとがめる心をもつて居ようとは——あゝほんとに何といふ私であらうか。私にはたゞこれだけのちひさなことも出來ないのか、そんなに何にも出來ない私なのか。ほんとに何といふ私であらうかと、私の心は曇つた。

けれど、まだしも言葉の凡てがそとへ出ないうちに氣がついてよかつた。「だからさつき」と言つた言葉も、低かつた故Kの耳には屆かなかつたかもしれない。ほんたうに氣を注けよう、再び同じ悔いをくりかへさぬやうに——と、私は自分で自分を注意しそして慰めた。

晩御飯の仕度をしてゐる私の耳に、誰かに話してゐるKの聲がきこえて來た。

『私ね、さつき寢てたら姉さんが何處とかへ行くからなんか見ておいてくれつていふんでせう、眠くて眠くてめんどくさくてたまらなかつたから、いゝかげんにきいといてうんうんと返辭しといたの。それから眼がさめた時にいつて見たらすこし焦げついてたのよ、だから今夜のおかずの焦げついたのは私のせいだわ』と、Kはおかずの申譯をしてゐるのであつた。

あゝやつぱりさうだつたと、私の眼には涙が浮んだ。さうであつた、Kの心はやつぱり私の思つた通りであつたのだ。Kはやつぱり「してあげたい」といふ優しい心を持つてゐるのであつた。私の思つたことは間違つて居なかつた。

そして、私がこれからしようとすることも決して無意味なことではない。ながい時間の間にはきつと私の心もKに解され、Kの心も私の心へ解けてきて、外面にまで優しさが溢れでるやうになるであらうと、私の心は何か大變ないゝことを思ひさだめたやうに嬉しくなつた。ほんとにそれはさまざまなことゝ比べてはどんなに無價値であり無意味であつても、私にだけはうれしい尊いことであつた。かく思ひ得た自分の心が、自分でうれしかつたのである。

編輯雑觀

△どうかよくなれかしと願ふビアトリスの創刊號に小說のやうなものを書かうと思つてゐましたが此度出版した歌集の仕事とかちあつてしまつて、どちらの役にもたゝないのに、あちらこちらとたゞ氣ばかりもんでゐるうちに原稿の〆切日が來てしまひました。二日ばかり前から少しは暇になつて居りましたが二日ばかりで急いで書きあげたものを、創刊號に發表する氣にはなれませんので、今月は短歌だけ發表する事にいたしました。創立の時の働きも家や子供を持つてゐる私には、外の方の半分も出來ず、又かうして書く方でも、思ふやうにゆかなかつたのが、何とも言へぬすまない心持をおこさせます。來月こそは何か長いものを發表します、どうかしつかりしたものを書いて見たいと思ひます。今月の私をどうかお許し下さい。でも短歌だけはしつかりと作つたつもりで御ざいます、心と筆のたりないため見ぐるしいものとなつたとしても、自分にしては力一杯で作りました、一二首はそれほどでもありませんでしたけれど。
△今私の心にはビアトリスを立派なものにしてゆきたい心が湧いて居ります、どうかほんとうの意味で榮えてゆくやうに、さうして私たち女のために、なくてならぬ舞臺となつてくれるやうに私は心からそれを祈つて居ります。皆樣もさう思つて力を入れて下さい。（邦子）

△まだ單物には早く、と云つて一つ袷が肌に浸じむ汗で、冷たく感じる位な陽氣の日でした。私は夕方から神樂坂の方へ買物がてらの、散步に出かけて歸つて來ますと、その留守に二人の女の客人が來られて、その方達は此日の正午頃、丁度私が洗湯に行つた留守にも來られて無駄足をせられ、また今晚も都合して出直して來るから……と云ひ置いてゆかれたことを姉が傳へました。私はその方達の年齢や容子などを、いくら訊いて見ましても隣張り誰方であるかゞ考へつきませんでした。そして餘り外出もしない方の私が三度も、その方達の足を運ばせることをほんとうにお氣の毒に思ひましたので、その晚は早く夕餉をすまして、座敷の電球を取りかへなどして待つてゐました。
△その晚いらしつたのが生田花世さんと山田たゞ子さんでした。私は此お二人には全くの初對面であつたので、此突然の御來訪を大變嬉しいことに思ひました。そしてその時のお話は私が全く期待してゐたようなこと許りでした。私はほんとうに眞面目な心持ちでそれを贊成いたしました。それから私等が働き出したことは、生田さんや山田さんが悉しく書いて下さるだろうと、思ひますからこゝにはよします。それで兎も角もこんなに早く雜誌の創刊されたことを、先づ皆樣に御禮を申上げておきます。そして此雜誌から生れるものは、吐き出されるものは、今迄のように社會の道德を無視したり、徒らにその時時の感情にかられて空論を吐いたり、論爭をしたりして、それで自らの行動は全く反比例してゆくといふような、そんな淺薄な傲慢な態

度には初めから出たくないと、心掛けておりますから、從つて皆樣にも社會にも有害な、妙な毒瓦斯を吹きかけるといふようなことは斷じてないと、私は信じて居ます。健全な貞淑な思想のもとに、この文藝の道に崇高な趣味を養つて、進んでゆきたいと私達は思つております。どうぞ皆樣も御同感のうちに、熱心なこの雜誌の愛讀者とおなり下さることを希ひます。

△英木しづ樣、その後御からだはいかゞで被入いますか。わざわざ御訪ね下さいしたあの翌晩、私も早速お訪ねいたしましたらば、もうお引移りになりました後で、それから松の湯の近邊を探がしておりました時は、ひどい夕立ちに逢ひましたので、そのまゝ逃げて歸つて了ひました。きのふはまた御轉地なすつた後で、とう／＼お見舞ひにもうかゞはれませんでしたことをおわび申上げておきます。（倭文）

△創作にまれ評論にまれ、夫れを書くと云ふ以上は一活字になつて他人の心耳に觸れなければ、未だ表現の努力が充分だと云はれない、斯う或る人が云つたのでありますが、全く力を籠めて書いたものは、其の巧拙は第二として、何うかして單行本とするか、雜誌に掲載するか、いづれにしても是を讀者の鑑賞眼に訴へ、その批判を受け度いと思ふ『發表欲』が、可成りに力強く私達の胸を衝くのであります。此の止みがたい『發表欲』を心に感じつゝ、それ丈で何も書く事の出來ない繁雜な職業に就いてゐた反動からして丁度水玉が一つ一つ葉末に溜まつて雫と落ちるやうにぽつり／＼、極く淺薄な幼稚なものを書いて、然しそれを何うかして「發表したいと思つても其の方法のないのに苦しんでゐた私は、嬉しいお誘ひをお友達の二三人から受けたのであります。『雜誌をしようではありませんか。私共の力が集まれば屹度出來ますから』それは私に嬉しくもあつたし、又可成り不安な事でもありました。女ばかりの雜誌として、『青鞜』と『番紅花』とが私達の前に本當に好い收穫を殘してくれてゐます。殆んど私はこの二つの雜誌に育てられて來たと申していゝのでございます。そして其の後から私達の幼い芽を伸ばして行く、——考へると非常に希望も燃え、又、反省すると自分達の微力が氣遣はれる事でもありました。けれども一人二人とお誘ひしたり、相談に行つたり、贊助員にとお願ひに出たりすると、何處でも等しく繰り返された事は『結構だと思ひますよ。女の文藝雜誌は今のところ一つもありませんから好く行くでせう』と云ふ言葉で、直ぐ入つて呉れたり、種々の便宜と厚意を寄せて下さる人の多かつた事が、どんなに私達の意外な、且つ嬉しい事でありましたらう。で、雜誌の賣れない月だといふ七月八月を向ふに廻はしてゐても無頓着な、寧ろ物ともしない心持で纏めはじめると、丁度一杯の風を帆に孕んで水の上を辷るやうな順調さで萬事好い案梅に成立して了ひました。必要と云ふ事が何事の成立にも缺くべからざる第一條件であると云ふ事を私達はかうして實際に見たのでございます。

△贊助員となつて下すつた方々の御厚意を思ふと何とお禮申していゝか知れません。私達が贊助員の方々に對しての心持は丁度一家の中での父母なり兄姉に對するやうなもので、格別世話を願はなくとも、亦時には我儘をしても、矢張無くてはならない人々としての親身らしい立入つた注意と指圖とをして頂きた

いと思つたのでございます。卑しい依頼ではなくつて、愼重な行き方の爲めとして。

△別欄を設けてそれに賛助員の方々、及び文壇の大家の御寄稿を毎月數篇掲載するといふ事にしたのは、幼稚な私達の進歩を促すにはいゝ事だと信じます。田村とし子氏、與謝野晶子氏、河井醉茗氏を初め生田長江氏、水野葉舟氏、若山牧水氏の御原稿は創刊號にといふ豫定の御承諾を得てゐましたのですが其の後の事情がどう〳〵間に合はなかつたのです。けれども次號より段々に頂かれると思ひます。小説月評等をも書いて頂くやうにしたらよい等私達は申してゐます。

△平塚らいてう氏は唯今相州茅か崎南湖院の傍のお家で可愛らしい曙生さんと段々快方に赴かれる奥村博氏との靜かな樂しい生活の大半を讀書思索に耽つておられますが、『ビアトリス』の賛助員にとのお頼みを『充分お助けするだけの力の無いのを御承知なら』と承諾して下さいました。そして御寄稿下さつた『新道徳と新不道徳』は『野枝さんのあんな事件もあつた事ですし幾分か参考になるかと思つて』との御執筆でございます。次號にも書いて頂かれる事と思つてゐます。

△素木しづ子氏は發起人の一人として始めから種々考へて下さつたし、私達は何呉れ相談してゐましたし『創刊號には是非十五枚位の短篇を書きますわ』かういつも云つて居られたのです。それが殘念な事には梅雨まへの惡い天氣が、彼の方のお弱い身體に當たりました。そして急に平塚海岸の方に行く事となつた前日お訊ねしてそれを優しいお口から原稿の出來ないお詫と一緒に聞いた時、私達は本當に力を落したのでございます。でも、『あちらで力の入つたものを書いて送りますわ』と云はれました。どうぞ南の方の柔かい光と明るい空とが彼の方の健康をとりもどして呉れるやうにと私達は祈つて居りゝす。

△『會員は男女諸氏を含む』此の清規の一項は可成り私達の頭を使つた事でした。けれども私達の『ビアトリス』を本當によく育てゝ行く上に男性の方々からの批評や、注意や、保護や、愛護を、女性の方々からと等しく受けるのが必要だと云ふ事が思はれたのであります。そして此の『ビアトリス』が男性の方々の胸に、懷かしいもの、優しいもの、美しいもの、親しいものとして匂やかに映る事が非常によい事だと思はれたのであります。

△力を合はすと云ふ事が私共の心に與へる快感と云ふ事が考へられます。今は私達何十人と云ふ心が『ビアトリス』にすつかり集注して、唯此の事の爲めに話し、此の事の爲に考へるといふやうな快い興奮の狀態に入つてゐます。そして成し得る範圍に於て、私達は金と手足の勞と又精神上の營みを此の『ビアトリス』に投じて居ます。斯うして何か微かにも此の『ビアトリス』に與へてゆけば、必ず私達は『ビアトリス』の生長とともに優しい尊い愛情を得てゆくと思ひます。私達は男女すべての人々が此の『ビアトリス』に其の手を伸ばし、よい愛情を得て下さるやうにと思つてゐます。『どうかいゝ雜誌となり、いゝ仕事をしてくれるやうに』私は今もかう心から『ビアトリス』の爲に願つて筆を擱く事と致します。(花世)

△社員會は七月中旬頃發起人中の適當の家を撰んで開きます。其節にはいづれ御通知申上げま

すが、何卒萬障御繰合せの上御出席を願ひたいと存じます。

△社員の御寄稿は編輯の方からもお願ひはいたしますが、皆樣の方でも進んで御寄稿が願ひたいと存じます。締切は毎月嚴に十日限と致します。原稿が集まらないために、雜誌の發行が遲れることは經營上非常な打擊でございますから。

△社費及び會費は當分の間、二三ヶ月分纏めて、小爲替で御送附を願ひたいと思ひます。其うちに振替口座を設けますから。

△社費及會費は市內は御希望に依つては、社の方から毎月集金人を差上げます。其向の方は御一報を願ひたいと存じます。

△雜誌不着のやうなことがあります時は至急本社に御問合せ下さい。

△寄附の事を折々皆樣方からお問合せに預りますが、本誌の經營費は發起人が各自醵金して居りますけれども何分微力ですから、御援助の御厚意をお寄せ頂かれたら、多少に拘はらず御願ひ申したいと思ひます。

△會員社員を合せて大凡四百人もあれば本誌は大した苦痛もなく確實に維持する事が出來るのですから皆樣が各自二人位の會員をお誘ひ下すつたら社の經營は大變樂になります。どうぞお友達におすゝめ下さるやう願ひます。

△社の面會日は月曜、木曜の兩日午前九時から午後四時迄といたします。其の日には社員の方々も出來るだけお出で下さる事を願ひます。

（たづ）

花香園を訪ふ

倭文子

京濱の鶴見花月園前で電車を降りてから右へ半丁程、市島家別邸の深い樹立ちに添ふて行つたところに、長谷川さんの現今のお住居があります。

丸木の門柱にはいつか新家庭の寫眞で見た通りな、風雅な美しい文字で、田舍御料理旅館、花香園新玉といふ看板が兩方にかけてあります。門からはやゝ遠い山道風の傾斜を、兩側にある櫻並木の間を昇つてゆくと、直ぐ取つ付きの離座敷の袖垣のうちから、十四五の可愛らしい娘さんが出て來ました。髮を古風なお稚子に結つて、長い袖の友禪の單物に洗朱の細めな帶をきゆつと結び、紫縮緬にふじ枝と白く染め拔いた、前だれをしてゐたのが何となく、京の祇園邊りを偲ばせて床しい感じがしました。ニコヤカに此方に挨拶をしてから、母屋の方へ向つて、

「何室へ御案内しませう、一寸うかゞつて下さいな」と、そこの廊下へ出て來た女中に奥へうかゞはせてから、私達は母屋とは細長い廊下續きになつてゐる、お座敷へ案内されました。

座敷は十疊と六疊の二間つゞきで、床にはあつさりと、百合や薄やをとりまぜた挿花の籠と、古物らしい香爐とが飾られ、しもての隅には松園女史か誰かの筆になつた、秋の夕べに庭へ降りて砧を打つてゐる女房の、誠に感じのいゝ二折れが置かれてありました。

つや〳〵と拭き込んだ椽側へ出て見るまでもなく、座敷からは直ぐ眼の下に緑色も田圃を越して、碧い海が一面に展けてゐます。いつも山の手の鬱陶しい樹木や、板塀や、坂やなど許りを見馴れてゐる私は、此頃頻りに濱邊でも歩いて見たいような、氣持ちがしてゐた爲めか、そこは少し海が遠過ぎるようにも思はれましたけれど、また大森のように泥水が座敷の下まで來て、ヒタ〳〵してゐるよりは遙かに勝つてゐると思ひました。そして私はあの紀三井寺から和歌の浦の絶景を眺めやつた時のことなどを思ひ出して、却つてその眺望が大變好きになつて了ひました。

「ようこそいらつしやいまし」次の間に三つ指をついて、挨拶してから這入つて來た女中は、廿二三の意氣な、それにも榮とか染め出したお揃ひの前だれをしてゐました。だん〳〵に運び出された煙草盆や、茶器や會席風に盛つた大きな菓子器も、すべて黒塗りで、黒八反の座布團も陰氣にはならなくて、どれもこれも氣持ちのよいもの許りでした。

埃の最もよく眼につきやすい塗りものを、奇麗に掃除してある程氣持ちのよいことはありません。いつでしたつけ、飛鳥山邊りの歸途をわざ〳〵新富町まで廻つて、「竹葉」へ寄つたとき、そこもすべてが黒塗りで、黒い床に早咲きの白百合を一輪投げ込んであつたのも、今に忘られないよい感じがしました。

私はかねて戴いておいた岡田八千代様からの紹介状を出して、何といつていゝかわからないのでたゞ、「いらつしやいますか」と、訊きました。女中はすばしこくのみ込んで、ニッコリし乍ら、

「時雨さんで御座いますか、時雨さんはきのふの朝東京へ被入つたきりまだおかへりになりませんが、お妹さんはいらつしやいます」

私は暫らく思案してゐました。きのふから大分身體の工合も惡いところを、時雨様に御目に懸りたい許りに憑ふして訪ねて來たものを、意地も惡く御留守だとは。八千代様の仰せには、土曜か日曜はお客様でおいそがしい故、きつと御在宅だらうと。おいそがしくて逢つては下さらないかも知れない、否、大丈夫、こんな立派な紹介状があるのだから……と、安心して來たところ、お留守では何とも致し方がない……私は何だかつまらなくなつて了ひました。が、つまらなくないのは兒供や婢とみえて、山の下を汽車が過ぎたり、電車が來たり、海の上に給のような白い帆前船や、大きな黒いお船などが浮ぶ時、兒供はもふ嬉しくつてたまらないといふように、まだまわらぬ口で何か云ひ云ひきやつ〳〵と、座敷や廊下、椽側などを飛び廻つたりしてゐました。

食事はあつさりと、四五品のものを誂らへてすませました。

山の手の店頭に水をかけ〳〵しては、賣つてゐるような魚やのとはこと違ひ白い作り身も、碗の蓋を取つたその時の感じも、殊に胃腸を害してゐる私のために、女中のきかせてくれた氣轉も嬉しい、鉢のものなどは結構でした。が、御酒を戴かない私達にはちと料理のあい間〳〵がのびすぎて、隨分退屈して了ひました。併しその間に兒供と園内のさまを見ることも出來ました。小高い山が三段になつてゐて、みんな洒落たお座敷が彼方此方にありました。

「お坊ちま、被入いまし」などゝお愛相を云ひ乍ら、遠い離座敷へお挺子を運ぶ十七八の、それも長い袖の友禪にすゝきのかんざしをさしてゐました。つるべ井戸の彼方まで庭下駄の音がカラ〳〵と可愛くきこえて、白い菖蒲や淌紅の花の間に紫の前だれが、ヒラ〳〵と舞つて繪のように見ゑました。黄い胡蝶も舞つてゐました。さゝやかな水の音もしてゐました。

私達のお座敷の女中は何を感違ひしたのか「時雨さんも夕方にはおかへりですから、どうぞ夜分まで御ゆつくりとね」などゝ夫に向つて云つてゐましたが、私達はそうしては居られませんでした。私は先刻の紹介狀を女中に渡して、

「ちやとれをどうぞおうちの方にお目にかけて下さいませんか」

私達は他の割烹店へ上つた時とは違ふ心持ちをもつて、女中にもなりたけ丁寧な四角い言葉を用つてゐました。間もなくお座敷へ、まだ一層お若い、そして上品でお美しい女(かた)が這入つて來られました。

「生憎今日は姉が留守で御座いまして……」と、いふお言葉で私はその方が時雨樣のお妹さんだといふことを察しました。其處で私は此雜誌のことをざつと申上げて、時雨樣にお傳へ下さるように御願ひいたしました。

踊り際に椽側のところへ一寸出ていらしつた品のいゝ、眼鏡をかけたお年寄りが、もしやお母樣ではなからうかと存じましたが、私はたゞ默つて頭を下げて來ました。

電車に乘つてからも私はあの牡丹の花を見るように艶やかな、それで折りかゞみの低い上品なお妹さんの姿が、眼の邊りにちらついてゐました。そして私は夏の月のいゝ晩に、輕い浴衣がけで、も一度花香園へ行つて見たいと思ひました。

ビアトリス社清規

一、本社は文藝を愛好及創作する女性を社員とし雜誌ビアトリスを刊行するものとす。
二、本社會員は一般の男女諸氏を含む。
三、本社會員は女子に限りて本誌に寄稿することを得。
四、會員の寄稿は文壇大家の嚴密なる撰擇の上、其の優秀なるものは本誌上に掲載し、他は批評を附して返送すべし、(但投稿は相當返信料を附せらるべし)
五、一度其作品を本誌上に掲載せられたる會員は本人の希望により社員となることを得。
六、社員費　三十錢。
七、會員費　二十五錢。
八、本社は毎月一回社員會を開く。
九、時に社員及會員の茶話會を開き文壇大家の清談あるべし。
十、本誌の編輯及經營は發起人中の幹事これに當るものとす。

此頃の草木の濃い色艶や明瞭した空の模様などを見ると今年も亦隨分暑さうな夏の近付いて來るのを感じさせられます。そして活躍しようとする自然と同じ力のもとに、私どもゝ亦何か生々と考へたり、働いたり、新しいものを書いたりせずには居られないやうな氣持がいたします。

あなたも亦さうではございませんか。

私達はそんな押し出されるやうな要求のもとに今度皆で力を合はせて私達の雜誌『ビアトリス』を出す事といたしました。『ビアトリス』とは御存じの通り、詩聖ダンテが、神曲の中で久遠女性と讃美した崇高な女性の名でございます。女性としての眞と美と愛の權化として歌はれた此の美しい名は、私どもが女性としての立場なり生活なりを、思索したり創作したりする雜誌の名には何よりだと思つたのでございます。

あなたも私達の群れの中にお手をおつなぎ下さいませんか。そして本當の藝術に對する愛情で團結する私たちの大切な雜誌をいつまでも續かせるために御援助下さいませんか。

あなたに會員になつていたゞきたいと私達は皆で思つて居ります。本當は、まおつてお話申す筈ですが何分慌しく事が運んだので、略儀ながら書面でおたのみ申します。

御快答がいたゞけたら幸と存じます。

猶お知り合ひの男女諸氏の中で會員とおなり下さる人があれば、どうぞ御紹介下さいまし。

賛助員芳名　（イロハ順）

生田長江　長谷川時雨　德田秋聲
小川未明　太田水穗　岡田八千代
尾島菊子　若山牧水　河井醉茗
與謝野晶子　田村俊子　中村弧月
窪田空穗　秋田雨雀　水野葛舟
平塚明子　森田草平

發起人　（イロハ順）

生田花世　原阿佐緒　岡本かの
岡田ゆき　若山喜志子　加藤みどり
吉屋信子　山田わか　山田邦子
山田たづ　五明倭文子　齋賀琴子
素木しづ　杉浦翠子

社員名簿（承諾順）

原阿佐緒　岡本かの　岡田幸子
若山喜志子　加藤みどり　吉屋信子
山田わか　山田邦子　山田たづ
生田花世　五明倭文子　齋賀琴子
素木しづ　杉浦翠子　村岡たま
世良田優子　新免榮子　江森笙子
吉淵百合　齋藤京子　佐藤幸子
久保田富枝　松井靜代　望月れい
平塚つげ枝　草野百合　小林とみよ
坂本眞琴　馬淵さわ子　井口ますゑ
小口みち子　吉村代志、（以下次號）

寄贈書籍雜誌紹介

歌集『光を慕ひつゝ』　山田邦子著

自由な豐富な感情をすつきりとした才氣ある聲調に盛つて、その一首一首に信濃の女性と云ふ特徴を充分に見せてくれる若い歌人山田邦子氏の『光を慕ひつゝ』と云ふ歌集が新しく市に出ました。『しづもり』『隅田川』『青光』『しらべ』『母と其の兒』『みなぎる春』『故郷と他郷』の各篇に收められてゐる五百首にわたる歌を讀み了つて、此の前の氏の歌集『片々』に現れてゐたお歌とは大變に違つて來てゐるのを私は見出しました。『片々』に現れてゐるお歌では悲歎懊惱、懷疑の暗い鎖に囚はれて、思はず嗚咽の聲を洩らすやうな、感情が餘りに激しい技巧の伴はない、破れた感じをよべるお歌が少くはなかつたのを記憶してをります。然るに此の新しい歌集によると太田水穗氏がその序に於て云はるゝが如く「女史の主觀の花は今や靜かなる實りを就さうとしてゐる重疊起伏せる幾山河を越え果てようとして前路に洋々たる平湖を望むと云ふやうな靜かな落ち着いた、また何とも知らぬ救ひの希望に滿たされようとする處が見える。恐らく光を慕ひつゝは此點に於て即今の女史の心の願ひを象徴したものと信ずる」それのやうに、私も亦同じ事を感じたのであります。

人と云ふ人の心にくちづけてなづる其日のいつ來るらんぞ

氏はかう歌はれてゐますが、かうした廣い大きい愛を求める心境が、氏の此頃の緊張した眞劍な生活の基調となり秀歌となつてゐる事を思ふと心から喜びに堪へません。好きな歌の澤山ありました中でもその二三をあげますと。

冬深みあたりさびしく暮れてゆく此濠の水に浮ぶ水鳥
ちらばれるおもちやのなかに青々し春の齋のいまはまぢれり
ちりにかも泥にかも似しわが内に一粒光るたまよ淋しき

（定價六十錢、東京牛込區山伏町二六〇曙光社）

銀の壺　第一卷七月號　四谷區傳馬町三ノ廿七

女の世界　第二卷七月號　麹町有樂町實業の世界社

別欄

自覺せざる偉大

森田草平

○『自覺せる』若しくは『意識して』といふ言葉が近代的傾向のモットーと成つてから既に久しい。自覺せざる德操は最早德操として遇せられない。自覺せざる貞操、自覺せざる忠君、自覺せざる愛國、皆其の價値を失つた。『無自覺な女』に至つては、所謂『醒めたる女』どもから侮蔑の眼を以て見られ、嘲笑の的とさへされて居る。又、甚しき價値の顚倒ではないか。

○自覺せざる善が善と見られなく成つた結果、惡ですら單に其の自覺せると云ふ故を以て、意識して行はれた惡であると云ふ所以を以て、公然他人の前に誇張して話されると云ふやうな傾向を馴致した。一時僞善家に對して所謂露惡家の横行を來したのも、一にそれが爲である。自覺なるかな。

○釋迦が衆生濟度の自覺、基督が萬民救濟の自覺、彼等は自覺に據つて立つた。そして、あれだけの大業を成し遂げた。自覺の偉大なる力は爭ふ餘地がない。が、それが一切であらうか、果して究極の境地であらうか。

○此處に匿名で數萬金を慈善事業に寄附した人が有るとする。其人は賣名のために、若しくは勳爵を贏ち得んがために、同じ事をした人よりも一層尊く、一層美しい。が、若し其人が善を爲すとも知らずして善を爲して居たとすれば、全然意識せずして善を行つて居たとすれば、更に一層尊く美しいものが有りはしないだらうか。私は左樣いふ善行を幾多の修道を經た高德の聖者に見る、同時に又無智文盲の市井の勞働者の間に見る。

○あらゆる階級と職業との人間の中に在つて、好かれ惡しかれ、一番自意識の强いのは、職業柄何うも文學者と云ふ階級らしい。文學者と云ふ職業の性質が左樣させるのである。『俺は天才か天才でないか』と云ふやうなことを一番苦に病んで居るのは文學者である。氣を負ふた若い文學者の間には、單にそれを自分一個の問題としないで、一般人類に係はつた一大事でもあるやうに考へて居る向きも往々にして有る。そして、自分が製作を發表するに到つた經路を『生みの苦しみ』と稱して、事々しく天下に吹聽する。勿論、文學者の仕事は或意味から言つて人類のためでも有らう。が、同じ意味に於て、田を作る百姓と雖も、矢張一般人類の働いて居るのではなからうか。電車の線路を直して居る工夫でも、坂で荷車を押して居る立ン坊でも――これを要するに、人類のために働かぬ者は人類として存在を許されない。然るに文學者のみが自分の職業を他の職業以上に神聖なものとして、自分の勞苦を神の祭壇にでも捧げられたものゝやうに吹聽する權利が有るのは、若しくは左樣いふ權利が有るやうにアッシユームするのは、何の故ぞやだ。

○一體、自分は『詩人』であるの、自分は『天才』であるのと云ふ高尙な、乍併同時に苦しい自覺は、何時の頃から文學者の間に始まつたことで有らう。舊約聖書の詩篇の作者にそんな物が有つたとは思は

れない。『イリヤード』や『オデッセイ』の作者にも恐らくそれはなかつたらしい。それが有るやうに成つたのは、少くとも文學者と云ふものが職業の性質を帶んで來て、同じ文學者の仲間から批評と云ふ横着なものが創められた以後に有るやうだ。從つて後世の文學者は大と小となく、皆自分は詩人である、天才であると云ふ自覺の下に働いて來た。尤も、一つ二つの例外は有る。そして、其例外が又偉大なる例外である。

○此間我邦でも三百年祭を行つたキリヤム●シエークスピヤは、故郷のストラトフオード●エボンを喰ひ詰めて、倫敦へ出て來て役者に成つた。が、役者としては一向成功しないので、試みに脚本を書いて見た。それが旨く當つた。それには又、當時第一流の役者がシエークスピヤの物を最負にして舞臺にかけても吳れた。そんな工合で、書く物も〳〵當りを取つた。終ひには自分に座主に成つて興行もした。シエークスピヤの座へばかり客が這入つて、他の小屋へは一向這入らなかつたと云ふやうなことも、記錄に殘つて居る。勿論、其間も脚本は書き續けた。十餘年の間に三十幾篇を書いた。大した努力である。が、シエークスピヤと云ふ人は自分は大詩人である、大天才であると云ふやうな自覺が有つた譯ではない。只、自分が書くとお客が來るから、錢が取りたさに『ハムレット』でも『マクベス』でも書いたのだ。で、四十歲位に成ると、好い加減に小金も溜つたので、脚本書きはさらりと止めて、さつさと故郷のストラトフオードへ引込んで仕舞つた。若し現代の文學者のやうに、止むに止まれぬ內部的要求なぞで書いて居たら、斯んな眞似は出來ない筈だ。只、氣の毒なことには、役者もやれば脚本も書く、興行主にも成ればステーヂマネージヤーも遣ると云ふ工合に、餘まり働いて頭腦を使ひ過ぎたので、これから樂隱居でもしやうと云ふ五十餘歲で死んで仕舞つた。

○一體シエークスピヤと云ふ人は一篇の戲曲を書くに、始めから終ひ迄一字も消したことがない相だ。全然書き流しである。從つて文法上のミステーキやリズムやミータアの間違ひが矢鱈に有る――私には解らないが、左樣いふ學者の說である。若し自分の作が後世に傳はつて、古今無双の大戲曲家として、日本でも三百年祭がして貰へると生前に知つて居たら、如何にシエークスピヤでもそんな書流しは出來ない。少くとも文法上のミステーキ位は直し置く筈である。其場限りの芝居の臺張だと思へばこそ、そんな眞似も出來たのだ。尤も、斯んな話を聞いたら、シエークスピヤもそんな自覺のないことぢや駄目だと、新に輕蔑の念を生ずる人々が有るかも知れない。が、私は此話を聞いた時、衷心からシエークスピヤが羨ましかつた。自分が大文學者とも天才とも思はないで、錢を取るために平氣で書いた物を、世界中の人類がこれ程迄にして大騷ぎをする。現代の文學者輩に對して、就中我邦の文壇に蝸牛角上の爭ひをして居る文學者輩に對して、これ程痛快な反語はないぢや有りませんか。

○勿論、私はシエークスピヤ程の大作をして、あれ程の名聲を博することは不可能だと知つて居るから、それが羨ましいと云ふのではない。只、シエークスピヤのやうな平氣な心持で作がして見たかつた。私どもゝ人並に是迄『文學者』と云ふ自意識に惱まされて來た。それにはほと〳〵勞れ果てた。最う好い加減にそんな自意識や自覺は失くしたい。それで居て、立派な作が出來れば尙更結構である。が出來なくとも可い。只、無自覺無自意識の狀態に這入れたら、それで可い。が、それすら出來相にない。

○私は前に意識せずして善行を爲し得る者は聖者か、それでなければ無智文盲の市井の徒であると言つた。私どもは最早市井の徒の無自覺には最早歸れない。さればと云つて、聖者が修道の路は餘りに遙かである。併し矢張其道を取る外はない――足は蹇えたりとも、力は弱くとも。（完）

雑誌規定

□毎月一回一日發行
□定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）
□前金購讀料四ヶ月分（壹圓）　六ヶ月分（壹圓四拾五錢）
　一ヶ年分（貳圓九拾錢）
□廣告料一頁（特（三拾圓）　一等（貳拾圓）　貳等（拾五圓）
　三等（拾圓）　半頁（五圓）
□郵券代用は壹錢貳錢に限る（但し一割增）
□編輯、經營、會員申込上の事務は一切ビアトリス社宛
　のこと
□原稿〆切期日は十日限りとす。

大正五年六月廿八日印刷納本
大正五年七月一日發行

東京市牛込區築地町六番地
編輯兼發行人　山田たづ

東京市麴町區紀尾井町三番地
印刷人　金澤求也

東京市麴町區紀尾井町三番地
印刷所　元眞社

東京市牛込區築地町六番地
發行所　ビアトリス社

東京市神田區表神保町三番地
發賣所　東京堂
電話本局四五六一番
振替東京二七〇番

○[illegible]再び第一歩も印したことがない相だ。

[illegible]の翻譯が大師に有る――私に[illegible]として[illegible]流し[illegible]ば[illegible]自然の[illegible]なこ

そそ、そんな[illegible]は出來ないのだ。丈も、斯んな話を書いた[illegible]る人々が有るかも知れない。が、[illegible]ならない[illegible]しかった。自分が大文學者でも天才でもないで、[illegible]を取る爲めに[illegible]とする。現代の文學[illegible]の[illegible]様に、動作の上の[illegible]をなして居る文學[illegible]家に對して、これ程痛快な反駁はないではないか。[illegible]

○勿論、私はシエークスピヤ程の大作をして、あれ程の名聲を博することを[illegible]るから、[illegible]それが[illegible]していると云ふのではない。[illegible]シエークスピヤの如な平凡な[illegible]で作して見たかつた。[illegible]と云ふ自意識に悩まされて來た。それ[illegible]。私は好[illegible]自意識や自然は失くしたい。それで居て、立派な作が出來れば問題結構である。が出來なくとも可い。只、[illegible]自意識の狀態に堕入れたら、それで可いのだが、それすら出來相にない。

○私は常に[illegible]を[illegible]て[illegible]行を[illegible]し得る者は[illegible]者か[illegible]の徒であると言つた。私とても最早市井の徒の無自覺には還り得られない。されば云つて、[illegible]者の[illegible]の路は徐々に道が有るか、[illegible]出現を待つ外はない――是は[illegible]たりとも、[illegible]は開くである。（完）